

# 『太平記』卷七・卷八（翻刻）

本稿は、二〇〇一年三月刊の『金城学院大学論集』国文学篇第四十三号に紹介した、中西所蔵本『太平記』の翻刻である。本『太平記』は、卷二から卷二十九までの、二十八卷二十八冊が現存しており、ここに紹介するのは、その卷七、卷八に当たる。

両巻の特長と思われる点について、以下に簡単に記しておきたい。

卷七、卷八本文全体の流れは、他の巻と同じく、基本的に神宮徴古館本に一致する。原本文をこすり消して訂正した部分はいくつかあるが、それらの原本文はいずれも神宮徴古館本に一致しており、訂正後の本文は、他の諸本に同じもしくは全く異文となるなど様々である。例えば卷七、9オ3行目は、「量シテ」と読めるが、ここは、「出シテ」をこすり消して、「量シテ」と上書きしたものであり、天正本と一致する。こうした例は両巻を通じてある。

卷七については、以下に記すような改訂が注目される。

11オ8行目と9行目の間には、目移りによる1行分の脱落があり、補入されている。16オ5〜6行目にかけての新田義貞の紹介をする部分で（「新田義貞賜給旨事」、原本文は、「上野国住人新田小太郎義貞ト申ハ八幡太郎義家ニ十七代ノ後胤」とある。これに対してまず「申ハ」と「八幡太郎」との間に「足利ノ新判官義康兄大炊助義重ノ嫡男

木	澤	水	筒	中
村	田	野	井	西
幸	佳	ゆ	早	達
代	子	き	苗	治

新田六郎朝氏長男ナレハ清和天皇十五代」という文が挿入され、さらに、「十七」が見せ消ちされて、「九」と直されている。前者の文中「新田六郎朝氏長男」とあるのは参考本の考証に従えば、毛利家本と同じく、天正本では、「義重ガ孫男六郎頼氏」となっている。また16ウ3行目では「不肖也云共」が見せ消ちされ「卑クモ源家」とされている。さらに同じページの7行目「船田入道畏テ」の後に「申ケルハ御錠尤ニテ候早思食立レ候エ」という挿入がある。これらはいずれも天正本本文に同じである。

卷八は、本文の改変挿入が多い。巻頭の「摩耶城合戦事付清辺瀬川合戦事」の冒頭部分では、

西国ノ敵接津国摩耶城ニ執上テ兵庫湊川ニ関ヲ【1オ】  
居タリト聞シカハ兩六波羅大ニ騒テ佐々木近江判官時信

という原本文に対して、「西国ノ敵」が見せ消ちされ、「先帝已船上ニ臨幸成隠岐判官清高合戦ニ打負テ後近国武士共馳参由出雲伯耆ヨリ早馬頻並ニ打テ六波羅エ告タリケレハ事已ニ珍事也ト聞人色ヲ失ヘリ又」と直されているのを始め、「大ニ騒テ」と「佐々木」の間に「都近所エ敵足ヲ溜サセテハ叶マシ先推寄赤松ヲ対治セヨトテ」、「佐々木」と「判官」のあいだに「近江」が挿入されるなど、改変が非常に多い。「三

月十二日京軍事」における赤松一族の奮戦譚にも大きな改変が認められる。その他33オ8行目「二条ノ寄手ハ破ニ臯」と「丹波国住人」の間に「朝忠高德行跡ノ事」、同じく34オ6行目「テッ闘臯」と「大将忠顕朝臣ハ」の間に「内野合戦敗北事」という章段名が、それぞれ本文とは別筆で補入されている。これらはいずれも天正本の章段名と同じである。また、本巻最末尾は、原本文が、

果シテ幾程モ不<sub>レ</sub>在ニ六波羅番場ニテ亡ニ臯  
とあるのに対して、

果シテ幾程モ不<sub>レ</sub>在ニ六波羅江州番場ノ宿ニテ亡ニ臯一類悉ク鎌倉<sub>ニテ</sub>亡<sub>ケル</sub>コソ不思議ナレ積悪ノ家ニハ必余歿有<sub>ト</sub>彼様ノ事ヲヤ申ヘキというように改編され、大きな書き込みが見られる。これらはいずれも天正本に依拠した改編と見られるが、詳しくは翻刻を参照されたい。翻刻に当たっては次のような点に留意した。

一、底本は、漢字片仮名混じりの表記である。本文の作成に当たっては、あとう限り原形を残すようにとめた。ただし、底本の本文には、脱字を欄外に補ったり、誤記、誤字の類を、見せ消ちにしてその上に新しい文字を書き加えたり、長文を書き加えたり、甚だしい場合には、張り紙をして異文を追加したりした箇所があり、本文の内容に関わる改変が行われている場合がある。しかもその改変は必ずしも本文と同筆とはいえないところが見られる。そのため翻刻に当たっては、通常の誤字、誤記の類はその訂正に従ったが、その他の場合には、訂正加筆された部分を、その旨本文中に示すなど、あとう限り訂正以前の元の本文が確認できるように配慮した。

一、各ページの終わりに、そのページの丁数・表裏の別を【1オ】のごとく示した。

一、仮名遣い、送りがな、宛て字、漢文表記等については、底本のままとし、みだりに改定を加えなかったが、書写者特有の造字等につ

いては通行の文字に改めたところがある。また「<sub>ノ</sub>」は「シテ」、「<sub>レ</sub>」は「ナリ」、「<sub>フ</sub>」は「コト」とした。

一、本文には、地名に二重の、人名に一重の朱引きがあるが、省略した。また朱による訂正は、その旨欄外に示した。

一、底本の破損、虫損、その他判読不能な箇所は□とし、推定できるものは□の中に当該文字を記した。

一、旧漢字は常用漢字に改めた。

一、異体字はそのまま記した。

一、書写者の書き癖はそのまま記した。例：「臯」⇨ける・けり

一、単なる誤記の訂正にとどまらないこすり消し、見せ消ちは、当該箇所の右に傍線を引き、訂正後の本文を小括弧（ ）に入れた。

一、異本については、小括弧で示した。異本表記のないもので、異本に記載のあるものについては、アスタリスク\*で示した。例：「恨<sub>ム</sub>」（「招<sub>ク</sub>」）「十七（十六）人」

一、本文への挿入は亀甲括弧（<sub>ハ</sub>）で示した。

一、本文左に挿入された注については、亀甲括弧に入れ「左注」とした。例：「壮<sub>カシ</sub>」（左注「サカン」）

一、翻刻は、中西達治、筒井早苗、水野ゆき子、澤田佳子、木村幸代の共同作業によるが、最終的文責は中西にある。

（巻第七）

吉野城合戦事

千鈿破城合戦事

新田義貞賜<sub>ニ</sub>綸旨<sub>一</sub>事

赤松蜂起事 付河野謀叛事

先帝船上潜幸事

船上合戦事

太平記卷第七

吉野城合戦事

元弘三年正月十六日二階堂出羽入道々蘊六万余騎【1オ】

勢ニテ大塔宮ノ令レ籠給ヘル吉野城へ推寄ル夏見川(菜摘川)ノ

河淀ヨリ城ノ方ヲ向上タレハ峯ニハ白旗赤旗錦旗深

山下風ニ吹乱レテ雲カ花カト恠タリ麓ニハ数千官兵胄

ノ星ヲ耀シ鎧ノ袖ヲ烈テ錦繡ヲ數ル地ノ如シ岸高シテ道

細ク山嶮シテ苔滑也去何十万ノ勢ニテ責ル共輒ク

可レ落トハ不見梟同十八日卯刻ヨリ兩陣互ニ矢合シテ

入替々々攻戦官軍ハ物孤タル案内者共成レ此ノ嶮岨

彼ノ難所ニ走散テ詰合セ開合テ散々ニ射ル寄手

ハ死生不レ知ノ坂東武者親子被レ討共顧ス乗越々々【1ウ】

責近ク夜昼七日カ間息ヲモ統ス相鬪ニ城中ノ勢三百

余人被レ討ニケレハ寄手ノ兵モ八百余人被レ討ニ梟況ヤ矢

ニ当リ石ニ打レテ死生ノ境ヲ不レ知者幾千方ト云不レ知レ數

血ハ草芥ヲソメ尸ハ路径ニ横レリ其而城ノ少モ弱子ハ

寄手ノ兵多ハ退屈シテソ見ヘタリ梟爰ニ此山ノ案内者

トテ一方へ被レ向タリ梟吉野執行岩菊丸己カ力者ヲ

呼寄テ申梟ハ金沢右馬助殿ハ已ニ赤坂城ヲ責

落テ金剛山へ被レ向タリト聞ユ当山ノ我我等案

内者タルニ依テ一方ヲ承リテ向タル甲斐モナク責落【2オ】

サテ數日ヲ送事コソ遺恨ナレ情事ノ様ヲ案スルニ此

城ヲ追手ヨリ責ハ人ノミ被レ討テ落事ハ難レ有(成)推

量スルニ城ノ後ノ山金峯山ニハ嶮ヲ憑テ敵サマテ勢ヲ

置タル事ハ非シト覺ルソ物孤タランスル足輕ノ兵ヲ百四

五十人勝テ陸(歩)立ニナシ夜ニ紛テ金峯山ヨリ忍入愛

深(染)宝塔ノ上ニテ夜ノホノノト明終ン時鬨ヲ揚キ城中

ノ兵鬨ニ驚テ度ヲ失ン時追手三方ヨリ責上テ城ヲ追

落シ宮ヲ可レ奉レ虜トソ下知シ梟即案内者ノ兵百四

五十人ヲスクリテ其日ノ暮程ヨリ金峯山ヲ廻リテ岩ヲ【2ウ】

ツタヒ苔ヲ上ルニ案ノ如ク山ノ嶮ヲ頼ミ梟ニヤ只此彼ノ梢ニ

旗計ヲ結付置テ可防兵一人モナシ百余人ノ兵共思ノ

俛ニ忍入木ノ下岩ノ陰ニ弓矢ヲ伏テ夜ノ明ヲソ待タリ

梟相鬨ノ比ニモ成ケレハ追手ノ五百(万)余騎三方ヨリ推寄

テ責上ル吉野大衆五百余人責口ニ下合テ防戦寄

手モ城中モ互ニ命ヲオシマス追上セ追下火ヲ散テソ戦

タル此処ニ金峯山ヨリ廻ツル擲手ノ兵百五十人愛深(染)

宝塔ヨリ下降テ在々所々ニ火ヲ懸テ鬨ヲソ上タリ梟吉

野大衆前後ノ敵ヲ防煩テ或ハ腹ヲ切テ猛火ノ中へ【3オ】

走入テ死モ有或向敵ニ引組テ刺違テ共ニ死モ有思々ニ

討死シ梟程ニ追手ノ堀一重ハ死人ニ埋リテ平地ニ成去

程ニ擲手ノ兵思ヲコラス勝手ノ明神ノ前ヨリ推寄テ宮ノ御

坐有梟藏王堂へ打懸梟間大塔宮今ハ不レ遁所也

ト思召切テ赤地ノ錦ノ鎧直垂ニ緋威鎧ノ未ダ已刻成ヲ

無ニ透間ニ被レ召龍頭ノ青ノ緒ヲシメ白檀疏ノ髓當ニ二尺

五寸ノ小太刀ヲ脇ハサミ劣ヌ兵廿余人前後左右ニ立テ敵

ノ鬨鬨テ扣タル中へ走懸リ東西ヲ難弘ト南北ハ追廻

テ黒煙ヲ立テ切テ廻セ給フ寄手大勢成ト云共僅ノ小【3ウ】

勢ニ切立ラレテ木葉ノ風ニ散カ如四方谷へ颯ト引敵ヒケハ

宮ハ藏王堂ノ大庭ニ並居サセ給テ大幕打上テ最後

御酒盛有宮御鎧ニ立所ノ矢七筋亦御類崎ニ〔所御〕腕ニ一  
所ヲ被レ突サセ給テ血ノ流更斜ナラス然ニ立タル矢ヲモ拔〔セラ〕レ  
ス流ル血ヲモ拭レス敷皮ノ上ニ立〔セ給〕ナカラ大盃ヲ以差受々々  
三度傾サセ給ヘハ木寺ノ相模四尺三寸ノ太刀ノ鋒ニ敵  
ノ首ヲ差貫テ戈鉞鉞戟ヲフラス更宛モ電火ノ  
如ク磐石千巖ヲトハス更春ノ雨ニ相同シ雖然天帝ノ

身ニハ近力テ修羅彼カ為ニコソ破レケレト拍ヲアケテ舞【4才】  
タル分野ハ漢祖（楚）ノ鴻門ニ会セシ時楚項伯ト項莊トカ鉞  
ヲ拔テ舞シニ樊噲庭ニ立ナカラ帷幕ヲカ、ケテ項王ヲニラ

ミシ威モ角哉ト見〔覺〕テ勇有追手ノ合戰更急也ト覺  
テ敵寄ノ鬨声相交テ聞臬カ〔リ〕実モ其戰ニ自ラ相當  
更多リ臬ト〔ハ〕見レ之村上彦四郎（左馬助）義光鎧ニ立所ノ矢十六

筋枯野ニ残ル冬草ノ風ニ伏タルカ如ニ折懸テ宮ノ御前  
ニ參テ臬臬ハ大手ノ一木戸云益ナク責破ラレ候ツル  
間ニ木戸ニサ、ヘテ数刻相鬨候ツルカ御所中ノ御酒盛

ノ御声涼ク聞ヘ候ツルニ付テ參テ候敵已ニ高二執上リ【4ウ】  
寄機疲候ヌレハ城ニテ防更今ハ不レ叶ト覚候未敵ノ  
勢ヲ余所ヘ廻レ候ハヌ先ニ一方ヨリ打破テ一先モ落テ御

覽可レ有候但跡ニ残留テ鬨兵候スハ御所〔宮〕ノ落サセ給フ  
者也ト得意テ敵何所迄モ烈テ追懸參ラセツト覚候  
恐有申更ニテ候ヘ共被レ召テ候錦ノ御鎧直垂ト御

物具ト下レ賜テ御諱ノ字ヲオカシテ敵ヲアサムキ御命  
ニ代リ參候ハント申ケレハ宮争其更ノ可レ有死ハ一所ニ  
テコソ兎モ角モナラヌト被レ仰臬ヲ義光言ヲ荒ニシテ  
漢高祖炎陽ニ困シ時紀信高祖ノ真似ヲシテ楚ヲ【5才】  
アサムカント請シヨハ高祖之ヲユルシ候スヤ是程ニ云益ナキ  
御所存ニテ天下ノ一大更ヲ思召立臬更ニコソ方見

ケレ早御物具ヲ令レ脱給候ト申テ御鎧ノ上帶ヲ奉リ  
解ケレハ宮更トヤ被レ思召ケン御物具鎧直垂迄  
脱替サセ給テ我若生タラハ汝カ跡ノ後生ヲ可レ訪敵ノ  
手ニ掛ラハ冥途迄モ同衢ニ伴フヘシト被レ仰テ御涙ヲ流  
セ給ナカラ勝手ノ明神御前ヨリ南ヘ向テ落サセ給ヘハ義  
光ハ二木戸ノ高櫓ニ上リ遙ニ見送り參ラセテ櫓

宮ノ御後影ノ遠ク隔ラセ給ヌルヲ見テ今ハ角ト思ケレハ【5ウ】  
櫓ノ小間ノ板ヲ皆切落シテ身ヲ露ニナシ大音声ヲ揚テ  
称臬ハ天照大神御子孫神武天皇九十六（五）代帝後  
醍醐天皇第二皇子一品兵部卿親王護良逆

臣ノ為ニ犯サレテ泉下ニ恨ヲ報ン為ニ只今自害スル  
分野ヲ見置テ汝等カ武運忽ニ尽テ腹ヲ切ンスル時  
ノ手本ニセヨト云俣ニ鎧ヲ脱テ櫓ヨリ下ヘ投下シ錦

ノ鎧直垂ノ袴計ニ練貫ノ二ッ小袖ヲ推シ膚脱テ白ク  
清キ膚ニ刀ヲ突立テ左ノ小脇ヨリ右ノ側腹迄一文字  
ニ掻切テ腸腑テ櫓ノ板ニ投付刀ヲ口ニ加ヘテ打伏（俯）ニ成テ【6才】

ソ臥タリ臬其時追手擲手ノ寄手見レ之其也大塔ノ宮  
ノ御自害有ハ我先ニ御首ヲ賜ントテ四方圍ヲトイテ  
一所ニ集ル其間ニ宮ハ引違テ天ノ川ヘソ落サセ給臬南

ヨリ廻臬吉野ノ執行カ勢五百余騎多年案内者ナ  
レハ道ヲタヘ〔遮キリ〕高二廻リテ打止奉ント執籠（奉）ル村上彦四郎  
義光カ子息右兵衛藏人義隆ハ父カ自害シツル時共  
ニ腹ヲ切ラント二木戸ノ櫓下迄馳セ来リタリ臬ヲ父大ニ  
諫テ宮ノ御前途ヲ見終テ參ラセヨト庭訓ヲ殘ケレハ  
無レ力暫シ命ヲ延テ宮ノ御供ニソ候臬更已ニ急ニシテ【6ウ】  
討死セスハ宮落得サセ給ハシト思ケレハ義隆只一人  
踏留テ追懸敵ノ馬ノ諸膝雜テ切スヘ平頸切テ刎落

サセ葛折成ル細道ニ五百余騎ノ敵ヲ相受テ半時ハ

カリソ支タル義隆心ハ岩石ノ如也ト云共其身金鉄ニモ

非レハ敵取卷テ射梟矢ニ義隆已ニ十余ヶ所ノ疵

ヲ被テ梟死迄モ尚敵ノ手ニ不懸トヤ思ケン小竹ノ一村有

中ヘ走入テ腹搔切テ死ニ梟村上父子カ敵ヲフセキテ討

死シケル其間ニ宮ハ虎口ノ死ヲ御遁有リテ高野山ヘソ落

サセ給梟出入道蘊ハ村上カ宮ノ〔御〕真似ヲシテ腹ヲ切【7オ】

タリツルヲ実ソト意得テ其頸ヲ取テ京都ヘ上セ六波羅

ノ実檢ニアワスルニ有ニモ有又者ノ首也ト〔申ケレハ獄門ニ懸迄モナク

テ九原ノ苔下ニ埋レケリ〕道蘊ハ吉野

城責落タルハ專一ノ忠戰ナレ共大塔宮ヲ打漏シ奉リ

ヌレハ尚不レ安ヲモイテ頓テ高野山ヘ推寄テ大塔ニ陣ヲ

取テ宮ノ御在所ヲ尋求ケレ共一山ノ衆徒皆心ヲ合テ

宮ヲ奉レ隠ケレハ数日粉骨ノ甲斐モ無ク千劍城ヘソ向梟

### 千劍破城合戦事

去程ニ千劍破城ノ寄手ハ前勢百八十万騎ニ亦赤坂

勢吉野ノ勢馳加テ二百万騎ニ余ケレハ城ノ四方二三【7ウ】

里カ間ハ見物相撲場ノ如ク打圍テ尺寸ノ地ヲモ余サ

ス充滿タリ旌旗ノ風ニ飄テナヒク気色ハ秋野ノ尾花

カ末ヨリモ繁ク劍戟ノ日ニ映シテ暈ク分野ハ曉霜ノ枯

草ノ上ニシ〔降〕ケル如也大軍ノ所近山勢〔山巔〕是カ為ニ動關

ノ震中ニ坤軸須臾摧テタリ此勢ニモ不レ恐城中ニ怵テ

防戦梟楠カ心ノ程コソ不思儀ナレ此城東西ハ谷深クシテ

人ノ上ルヘキ様モナク南北ハ金剛山ニ続キテ而モ其峯

絶タリ其而高二町計ニテ〔聳〕周一里ニ足又小城ナレハ何程ノ

叟カ可レ寄手是ヲ是〔見〕慢テ初一兩日ノ程ハ向陣ヲモ【8オ】

不取責支度ヲモセス我先ニト城ノ木戸口迄覆烈テソ

上タリ梟城中者共少モ騒ス静リ返テ高櫓ノ上ヨリ大

石ヲ投懸々々楯ノ板ヲ微塵ニ打碎テ所レ漂ヲ差詰引詰テ

散々ニ射梟間四方ノ坂ヨリ迹落テ落重テ手ヲ負

死ヲ致者一日カ中ニ五六千人ニ及ヘリ長崎四郎左衛門

尉軍奉行ニテ有梟カ手負死人ノ実檢ヲシ梟ニ執

筆十二人夜昼三日カ間筆ヲモ閣ス注セリサテコソ今

日ヨリ後ハ大将ノ御許モ無シテ合戦シタラン輩ヲハ却テ

罪科ニ可レ被レ行ト被觸ケレ依レ之軍勢且軍ヲ留テ先【8ウ】

己カ陣々ヲソ構梟赤坂大将金沢伊与守大仏ノ

奥州ニ向テ宣ヒ梟ハ先日赤坂城ヲ責落給ヒツ

ル叟全士卒ノ高名ニアラス城中ノ構ヲ推量シテ水

ヲ留テ候シニ依テ敵程ナク降参仕候キ其意ヲ

以此城ヲ見ニ是程纒成ル山ノ巔ニ用水可レ有共覺

候ハス亦上水ナトヲ余所ノ山ヨリ可懸便モ候ハヌニ城中ニ

水ノ卓散ニ有氣ニ見候ハ何様東ノ山ノ麓ニ流タル谷

水ヲ夜々汲ト覺候哀宗徒人々一兩人ニ仰付ラレ候

テ此水ヲ汲セヌ様ニ御計候ヘカシト申タリケレハ大将陸奥【9オ】

右馬助并長崎四郎左衛門尉此儀尤可然覺候トテ名

越々前守ヲ大将トシテ其勢三千余騎ヲ差分テ水辺

ニ陣ヲ取セ城ヨリ人ノ下降リヌヘキ路々ニ逆木ヲ引セテ

ソ待懸梟楠ハ元ヨリ勇氣第一成ル上又智謀無

双ノ者也ケレハ此城ヲ搦梟始又用水ノ便ヲ見ニ五所ノ

秘水トテ峯通ル山伏ノ秘シテ汲水此峯ニ有テ滴叟一

夜ニ五石計也此水何成日テリニモ更ヒル叟無レハ如レ形

人ノ口中ヲウルホサン叟相違有間シケレ共合戦ノ叟中

ハ或火矢ヲ消シタメ又喉ノ乾ク叟繁ケレハ此水計ニ【9ウ】

テハ不足ナルヘシトテ大成木ヲ以水船ヲ二三打セテ

水ヲ湛タリ亦数百ヶ所造並タル役所ノ斬二樋ヲ懸テ  
 雨降レハ其滴ヲ少モ余サス船ニ受入テ船底ニ赤土  
 ヲ沈メ水ノ性ノ損又様ニ拵タリケル間此水ヲ以縦五六十  
 日不レ雨共休ツヘシ其中ニ亦争雨フル無ラント料簡シ  
 梟智恵ノ程コソ浅カラ子去ハ強ニ此谷水ヲ汲ン共為サ  
 リケルヲ水防梟兵ノ毎夜二機ヲ詰テ今哉々々ト待梟カ  
 初程コソ有ケレ後ニハ次第ニ心怠リ機緩テ此水ヲ不レ汲  
 梟ソトテ用心ノ躰少ト無沙汰ニソ成ニ梟楠是ヲ見【10オ】  
 究テ究竟ノ射手ヲソロヘテ三百人夜ニ紛テ城ヨリヲ  
 ロシマタ篠目ノ明終ヲ霧ノ紛ニ推寄水辺ニ詰居タル  
 者共廿余人切伏テ大将ニ透間モナク懸リ梟間名越々  
 前守怵煩テ本陣ヘソ被レ挽梟寄手数万軍勢見  
 レ之渡合ントヒシメケ共谷ヲ隔テ尾ヲ堺タル道ナレハ輒馳合  
 スル兵モナシ兎角シ梟其間ニ捨置タル旗幕ナト取持  
 セテ楠勢ハ閑ニ城中ヘソ引入梟其翌日ニ城ノ追手三三  
 本傘ノ紋書タル旗ト亦同紋ノ幕ヲヒイテ是コソ  
 昨日名越殿ヨリ賜テ候ツル御旗ニテ候ヘ御紋付テ候【10ウ】  
 間他人ノ為ニハ無用候御内人々はヘ御入候テ被レ召候  
 ヘカシト云テ同音ニトツト笑ケレハ天下ノ武士共見之哀  
 名越殿ノ御不覚ヤト口々ニ云ヌ者コソ無リケレ名越一家  
 ノ人々此夏ヲ聞テ安カラヌ夏ニ被レ思ケレハ当手ノ軍  
 勢共一人モ残ヌ城ノ木戸ヲ枕ニシテ討死セヨト下知セラ  
 レ梟依レ之彼手ノ兵五千余人思切テ打共射共不  
 レ用乗越々々城ノ逆木一重引破テ切岸ノ下迄ソ詰  
 タリ梟其而岸高シテ切立タレハ弥猛ニ思ヘ共上得ヌ只  
 〔徒城ニラミ忿ヲサヘテ物居此時城中ヨリ切〕  
 岸ノ上ニ搔並タル大木ノ筒木ヲ十計切テ落懸タル【11オ】

間將基倒ヲスル如ク寄手五百余人厭ニ被レ打テ死ニ  
 梟是ニ違ント混ニ成テ所レ騒ヲ十方ノ櫓ヨリ差下テ  
 思様ニ射梟間五千余人ノ兵共残少ニ討成レテ其日  
 ノ軍ハ果ニ梟誠ニ志程ハ猛ケレ共只為出タル夏モ  
 無テ若干被レ討ニケレハ哀恥ノ上ノ損哉ト諸人ノ口遊ハ尚  
 未ダ止数度ノ合戦ノ躰ヲ見テ寄手モ侮リ悪トヤ思ケン今ハ  
 初ノ様ニ勇進テ責ントスル者モ無リケリ長崎四郎左衛  
 門尉此城ノ分野ヲ料簡スルニ力責ニスル夏ハ人ノ討ルハカ  
 リニテ其功成難シ只執卷テ食詰ニセヨト下知シテ且ク【11ウ】  
 軍ヲ止ケレハ徒然ニ皆堪煩テ花下ノ連哥師共ヲ呼  
 下一万句ノ連歌ヲソ始タリ梟其始日ノ発句ヲハ  
 長崎九郎左衛門尉師宗  
 サキカケテ勝色見セヨ山桜  
 ト為タリ梟脇句ニ工藤次郎左衛門尉  
 嵐ヤ花ノカタキ成ルラン  
 トソ付タリ梟誠兩句共ニ詞ノ縁巧ニシテ句躰優ナレ共  
 寄ヲ花ニ成テ敵ヲハ嵐ニ喩梟ハ禁忌ナリ梟哀  
 表事哉ト後ニソ思知レ梟大将ノ下知ニ随テ軍勢皆【12オ】  
 戦ヲ止ケレハ慰方ヤ無リケン或ハ困基双六ヲウチ  
 テ日ヲスゴシ或百服ノ茶褒貶ノ哥等ニテ夜ヲ明ス是  
 ニソ城中ノ兵ハ中ノ被レ悩タル心地シテ遣方モ無リ梟少  
 程経テ後ニ正成イテサラハ亦寄手共ヲ付寄手眠覺ント  
 云テ芥以人長ニ人形ヲ二三十作テ甲冑ヲ着セ兵  
 杖ヲ持セテ夜中ニ城ノ麓ニ立並テ前ニ帖櫓ヲ衝並  
 タリ其背ニ勝タル兵五百人ヲ相交テ夜ノホノッット明ケ  
 ル霞ノ下ヨリ同時ニ鬨ヲト、作ル四方寄手鬨声ヲ聞其  
 也城中ヨリ打テ出タルハ是コソ敵ノ運ノ所レ尽ノ死狂ヨト【12ウ】

テ我先ニトソ詰合梟ル城兵急テ〔兼テ〕巧タル亘ナレハ矢軍  
チト為ル様ニシテ大勢尚近ケハ人形ハカリヲ木陰ニ残置

テ兵ハ皆次第々ニ城ノ上ヘ引上ル寄手ハ人形ヲ誠ノ兵  
ソト得レ意テ是ヲ討タント相集ル正成所存ノ如ク敵

ヲ付寄テ太石ヲ四五十一度ニハツト放ス一所ニ集タル  
敵三百余人矢庭ニ打殺サレテ半死半生ノ者五百余

人ニ及ヘリ戦終テ見レ之ハ哀大剛ノ者哉ト覺テ一足  
モ不レ挽ツル兵三十人ハ人ニテハ非テ藁ニテ作レル人形

也是ヲ討ント相集テ石ニ被レ打テ死梟モ高名ナラス【13オ】  
亦是ヲ危テ進得サリツルモ其臆病ノ程顯テ旁以

云益ナシ只兎ニモ角ニモ万人ノ物笑トソ成ニ梟是ヨリ  
後ハ弥合戦ヲ止梟諸國ノ軍勢只徒ニ城ヲ向上テ

居タル計ニテ為ル業一モ無リ梟リ何成者カ詠タリケン  
一首ノ古哥ヲ翻案シテ大将陣ノ前ニソ立タリ梟

余所ニノミ見テヤ止ナン葛城ノ高間ノ山ノ峯ノ楠  
ト戦モ無テ坐ニ向居タル徒然ニ諸大将ノ陣々ニ江口神

崎ノ傾城共ヲ呼寄テ様々ノ遊ヲソ被レ為梟名越  
遠江入道ト同兵庫助トハ伯父甥ニテ御座梟カ共ニ【13ウ】

一方ノ大将ニテ責口ニ近ク陣ヲ取り役所ヲナラヘテ御坐ケ  
リ或時遊君ノ前ニテ双六ヲ打タリケルカ賽ノ目ヲ論シテ

聊言ノ違梟ニヤ伯父甥二人突違テソ被レ死ケル兩  
人ノ郎徒共亦見レ之何ノ意趣モ無ニ刺違々々片時カ

間ニ死者二百余人ニ及ヘリ城中ヨリ見レ之十善ノ君ニ  
敵シ奉ル天罰ニ依テ自滅スル人々ノ分野ヲ見ヨトソ笑ケ

ル誠是直事ニ非ス天魔波旬ノ所行カト覺テ浅増  
カリシ跡事也依レ之同三月四日関東ヨリ飛脚到来シテ

戦ヲ止テ徒ニ送日亘太不レ可然ト下知セラレケレハ宗徒ノ大【14オ】

將達評定有リテ向陣ト敵城トノ間ニ高ク切立タル所ニ橋

ヲワタシテ城ヘ打入ントソ巧レ梟此カ為ニ京都ヨリ番匠  
五百余人召下クシ五六八九寸ノ〔琵琶〕案ノ郡等〔甲〕ヲ集テ広一丈五

尺長廿余丈ニ棧ヲソ作セ梟棧已ニ作出シケレハ大綱ヲ  
二三千付テ總車ヲシテ卷立城ノ切岸ノ上ヘソ倒掛タリ梟

魯般カ雲ノ梯モ角ヤト覺テ巧也頓テ速雄兵五六  
千人梯ヲ渡リ我先ニト進タリアハヤ此城只今打落

サレヌト見タル処ニ楠兼テ用意ヤ為タリケン投松明ノ  
崎ニ火ヲ付テ其梯ノ上ニ薪ヲツメルカ如ニ投集テ水【14ウ】

彈ヲ以テ油ヲ滝ノ落様ニ懸タリ梟間火橋桁ニ燃付  
テ谷風炎ヲ吹布タリ愁ニ渡懸タル兵共先ヘ進トス

レハ猛火盛ニシテ身ヲコカス跡ヘ帰ラントスレハ後陣大勢支  
タリ側ヘ飛下ントスレハ谷深ク岩高シテ見タニモ冷シ何ニセン

ト身ヲモミテ押アフ程ニ橋桁中ヨリ燃折テ谷底ヘ倒  
トウト落ケレハ数千兵同時ニ猛火ノ中ヘ落重テ一人

モ残ス死ニ梟其分野偏ニ八大地獄ノ罪人ノ刀山劔  
樹ニ身ヲツナカレ猛火罐湯ニ骨ヲコナスラン苦モ角ヤト

思知レタリ去程ニ吉野十津川宇多内郡ノ野伏共大塔宮【15オ】  
ノ命ヲ含ンテ相集事七千人此ノ谷彼峯ニ立隠テ

武士往来ノ道ヲ塞ク依レ之寄手ノ兵粮忽ニ尽テ人馬  
共ニ疲ケレハ軋漕ニ怵煩テ百騎二百騎引掃処ニ安内

者ノ野伏共所々ノ詰々ニ待受テ討留梟間日々夜々ニ  
討ル、者幾千万ト云不レ知レ数希有ニシテ命計ヲタスカル

者ハ馬物具ヲ捨衣裳ヲ剥トラレテ裸ナレハ或破タル蓑  
ヲ身ニマトヒテ膚ヲカクシ或ハ草ノ葉ヲ腰ニマキテ恥

ヲアラハセル落人共毎日ニ引ミ切ス十方ヘ逃梟ハ前代  
未聞ノ恥辱也去レハ日本國ノ武士共ノ重代シタル物具太【15ウ】

刀刀皆此時ニ到テ失ニ梟名越遠江入道同兵庫助

二人ハ無<sup>レ</sup>詮口論シテ共ニ死給<sup>テ</sup>又其外ノ軍勢共親討ルレ

ハ子ハ髻ヲ切テウセ主疵ヲ被ハ郎徒助之引返間初

ハ百八十万騎ト聞シカ共今ハ纔二十万余騎ニ成ニ梟

新田義貞賜諭旨事

上野国住人新田小太郎義貞ト申ハ〔足利ノ新判官義康兄大炊助義重ノ嫡

孫新田六郎朝氏ノ長男ナレハ清和天皇十五代〕八幡太郎義家ニ

〔十七〕〔九〕代ノ後胤源家嫡流ノ名家也然而平氏世ヲ取テ四

海皆其威ニ服スル時節ナレハ無力関東ノ催促ニ随テ

〔金剛山ノ搦手ニソ被廻梟爰何成所存カ出来ケン〕〔16オ〕

或時執事船田入道義昌ヲ近ケテ宣梟ハ古ヨリ源平

朝家ニ仕テ平氏世ヲ乱ル時ハ源家之ヲシツメ源氏上ヲオカ〔犯〕

ス時ハ平家治<sup>ル</sup>之義貞不肖也云共〔卑クモ〕門楣トシテ譜代弓箭

ノ名ヲケカセリ然共今相模入道力行跡ヲ見ニ滅亡遠ニ非ス

我急<sup>ニ</sup>本国ニ帰リテ義兵ヲアケ前朝ノ宸襟ヲ休<sup>テ</sup>奉<sup>ル</sup>ント

存スルカ勅命ヲ蒙フラテハ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>叶奈何ニシテカ大塔宮ノ令旨

ヲ給テ此素懷ヲ達ヘキト問給ヒケレハ船田入道畏テ〔申ケルハ御諚

尤<sup>ニ</sup>候早思<sup>ニ</sup>固立<sup>レ</sup>候ヘ〕

大塔宮ハ此辺ノ山中ニ忍テ御坐候ナレハ義昌急<sup>キ</sup>方便

ヲ廻シテ令旨ヲ申出ヘシト亶安氣ニ領掌申テ己カ役〔16ウ〕

所ヘソ帰梟サテ其次日船田入道己カ若党ヲ卅余人野

伏ノ姿<sup>ニ</sup>出立セテ夜中ニ葛城山ヘ登セ船田入道ハ落行

勢ノ真似ヲシテ朝未<sup>ク</sup>霧隱<sup>ニ</sup>追ツ返ツ半時計同<sup>ト</sup>士軍

ヲソ為タリ梟宇多内ノ郡ノ野伏共見<sup>レ</sup>之寄<sup>ト</sup>ソト意得<sup>テ</sup>

合力ノ為ニ余所ノ峯ヨリ下合シテ近付タリ梟処ヲ船田

カ勢ノ中ニ取籠テ十一人迄生捕テケリ船田此虜ヲ

解<sup>キ</sup>許<sup>シ</sup>テ潜ニ申梟ハ今汝等ヲ付ツテ搦タル事全

誅<sup>ン</sup>為ニ非<sup>ス</sup>新田殿本国ヘ帰テ旗ヲ揚<sup>ン</sup>トシ給カ令

旨無<sup>テ</sup>ハ不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>叶ケレハ汝等ニ大塔宮ノ御在所ヲ尋

問<sup>ン</sup>為ニ召捕ツル也命惜クハ案内者シテ此方ノ使ヲツレテ

宮ノ御坐アラン所ヘ參ト申ケレハ野伏共大<sup>ニ</sup>悦<sup>テ</sup>其<sup>レ</sup>為ニテ

候ハ、<sup>イ</sup>敢安<sup>キ</sup>事ニテ候御使迄モ候マシ此中ニ一人暫ノ暇ヲ

給テ令旨ヲ申出シテ進<sup>マ</sup>候ハント申テ残十人ヲハ留置テ

一人宮ノ御方ヘトソ參梟今哉ト相待所ニ一日有<sup>テ</sup>令

旨ヲ捧テ来レリ開テ是ヲ見ニ令旨ニハ非<sup>ラ</sup>〔スシ〕テ論旨ノ文

章<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>書<sup>タリ</sup>其詞ニ云ク

被<sup>ニ</sup>論言<sup>一</sup>稱<sup>敷</sup>理化<sup>理</sup>万国<sup>一</sup>者明君ノ徳也撥<sup>〔左注ヲサメ〕</sup>レ乱<sup>ヲ</sup>

鎮<sup>ニ</sup>四

海<sup>一</sup>者武臣ノ節也傾年<sup>ノ</sup>際高時法師カ<sup>一</sup>類<sup>ニ</sup>蔑<sup>ニ</sup>如朝〔17ウ〕

憲<sup>ニ</sup>恣振<sup>ニ</sup>逆威<sup>一</sup>積<sup>ニ</sup>惡<sup>一</sup>之<sup>レ</sup>到天誅已<sup>ニ</sup>顯<sup>ニ</sup>爰<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>ニ休<sup>ル</sup>累

年ノ宸襟<sup>一</sup>將<sup>ニ</sup>起<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>舉<sup>ニ</sup>義兵<sup>一</sup>ヲ<sup>レ</sup>感<sup>ニ</sup>感<sup>ニ</sup>尤<sup>ニ</sup>深<sup>ニ</sup>抽<sup>ニ</sup>賞<sup>ニ</sup>何<sup>レ</sup>淺<sup>ラン</sup>

早<sup>ニ</sup>運<sup>ニ</sup>關東<sup>一</sup>征<sup>ニ</sup>罰<sup>一</sup>之<sup>レ</sup>策<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>致<sup>ニ</sup>天下<sup>一</sup>静謐<sup>ニ</sup>之功<sup>一</sup>者

論旨〔言〕如<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>執達<sup>ニ</sup>如<sup>レ</sup>件

元弘二年二月十一日

新田小太郎殿

トソ被書タル論旨ノ文章家ノ眉目<sup>ニ</sup>備<sup>ヘ</sup>キ論言ナレ

ハ虚病シテ急キ本国ヘソ被<sup>レ</sup>下梟宗ト戦<sup>ヲ</sup>モ為<sup>ツ</sup>ヘキ勢

共ハ兎<sup>ニ</sup>角<sup>ニ</sup>豆<sup>ヲ</sup>〔左右<sup>ニ</sup>〕ヨセテ己カ国々ヘ帰リ又兵糧運送<sup>ノ</sup>道〔18オ〕

絶<sup>テ</sup>千<sup>レ</sup>釵<sup>破</sup>ノ寄手以外<sup>ニ</sup>機<sup>ヲ</sup>失<sup>ヘ</sup>ル由聞ケレハ亦從<sup>ニ</sup>

六波羅<sup>一</sup>宇都宮ヲ被<sup>レ</sup>下梟紀清兩党一千余騎寄

手<sup>ニ</sup>加<sup>リ</sup>テ未<sup>キ</sup>氣<sup>早</sup>成<sup>惡</sup>手ナレハ外城ノ堀際迄責上テ

夜<sup>少</sup>引退<sup>ス</sup>十四日迄ソ責タリ梟此時ニソ屏ノ際

成鹿垣逆木共皆引破レテ城モ少防煩タル跡<sup>ニ</sup>見<sup>タ</sup>

リ梟然而紀清兩党ノ者共斑足王ノ身ヲモ借サレハ天



ヲモ翔リ難ク龍伯公カ力ヲモ得サレハ山ヲモ劈ツツ〔左注ツンサキ〕難シ余  
ニ為シ

方ヤ無リケン面成兵ニハ戦ヲセサセテ後成者ハ手々ニ鋤

鎌ヲ以山ヲ掘倒ントソ企梟実モ追手ノ櫓ヲハ夜昼三【18ウ】

日カ間ニ念無ク堀倒梟諸卒見レ之只始ヨリ戦ヲ留テ堀

ヘカリ梟物ヲト後悔シテ我モ々々ト堀ケレ共周一里ニ余レル

山ナレハ無ニ左右ニ堀倒サルヘシトハ不見梟

### 赤松蜂起事付河野謀叛事

去程ニ桶カ城郭強シテ京都ハ無勢也ト聞シカハ赤松入道

円心播摩国苔繩城ヨリ打出テ山陽山陰ノ兩道ヲ

差塞キ山ノ里梨ノ原ニ陣ヲ取爰備前備中備後

安藝周防ノ勢共六波羅ノ催促ニ依テ上洛梟ニ三石

宿ニ打聚テ山ノ里ノ勢ヲ追払テ通ントシケルヲ赤松筑【19オ】

前守船坂山ニ支ヘテ宗徒敵廿余人ヲ虜梟然ニ赤

松是ヲ不討シテ情ク深ク相ア夾梟間伊東ノ大和次郎其恩ヲ

感シテ武家ニ与力ノ志ヲ翻シテ官軍合躰ノ思ヲ成ケレハ先ツ

己カ館ノ上三石山城郭ヲ構ヘテ頓テ熊山ヘ執上テ義兵ヲ

上タルニ備前ノ守護加治ノ源太左兵衛門一戦ニ失レ利テ兎嶋

ヲ差テ落テ行是ヨリ西国ノ道弥塞テ中国ノ動乱不

レ斜西国ヨリ上洛スル勢ヲハ伊東ニ支サセテ後ハ思モ無

リ梟赤松頓テ高田兵庫助カ城ヲ責落シテ片時モ足

ヲ休ス山陽道ヲ押テ責上ニ路次ニ軍勢馳加テ程無ク七千【19ウ】

余騎ニ成ニ梟此勢ニテ六波羅ヲ責落サウスル夏ハ案ノ内ヲ

ナレ共若戦ニ失レ利ヲ夏モ有ハ引退テ暫人馬ヲ休シ為ニ

兵庫ノ北ニ当テ摩耶ト云山寺ノ有梟ニ先城郭ヲ構

テ敵ヲ廿里カ間ニ縮タリ去程ニ六波羅ニハ一方ノ討手ト

被レ憑梟宇都宮ハ千釵破ヘ向ツ西国勢ハ伊藤ニ被レ支

テ上リ得ス今ハ四国勢ヲ待テ摩耶ノ城ヘハ向ヘシト評定セラ  
レ梟所ニ後二月四日伊与国ヨリ早馬ヲ立テ土居次郎

得能トクノ彌三郎宮方ニ成テ旗ヲ揚当国ノ勢ヲ相付テ土

佐国ヘ打越候処ニ去月十二日長門ノ探題上野介時直【20オ】

三百余艘ニテ当国ヘ推渡リ星カ岡ニシテ合戦致ス処ニ長

門周防ノ勢一戦ニ打負テ死人手負其数ヲ不知刺時

直父子行方不知ト云々從レ其四国勢悉土居得能ニ属

間其勢已ニ六千余騎宇多津今張湊ヨリ船ヲ揃ヘ

只今責上ント企候御用心有ヘシトソ告タリ梟畿内ノ戦

未静サルニ亦四国西国日ヲ追テ乱ケレハ人心皆薄氷ヲ

### 先帝船上潛幸事

抑今如レ此天下ノ乱事ハ偏ニ先帝ノ宸襟ヨリ事起レリ若【20ウ】

逆徒差違テ奪取奉ントスル夏モコソ有相構能々警固

可仕ト隱岐判官カ方ヘ下知セラレケレハ隱岐判官清高近国ノ地

頭御家人ヲ催テ日番夜廻隙モナク宮門ヲ閉テ警

固奉ル二月下旬ハ佐々木ノ富士名ノ判官義綱カ番ニテ中門

警固仕候梟如何思ケン哀此君ヲ取奉リテ謀叛起ハヤ

ト思心ソ付ニ梟然而可申入便モ無シテ案煩梟処ニ或

夜御前ヨリ以ニ官女ニ御盃ヲ被下タリ判官之ヲ賜テ能キ次テ

成ト思ケレハ潜彼官女ヲ以申入梟ハ上様ニハ未シシロシ不レ被レ召

候哉覽精兵衛正成金剛山ニ城ヲ構テ楯籠候処東【21オ】

国勢百万余騎ニテ上洛シ去ニ二月初ヨリ攻戦候ト云共城ハ

強シテ寄手巳ニ挽足ニ成テ候亦備前ニハ伊東大和次郎三

石ト申所ニ城ヲ構テ山陽道ヲ差塞候播摩ニハ赤松入道

円心宮ノ令旨ヲ賜テ撰津国迄責上リ兵庫北ニ当リ

テ候摩耶ト申所ニ陣ヲ取候其勢已ニ三千余騎京ヲ

シ、メ地ヲスヘテ威近国ニ振候也四国ニハ河野カ一族ニ土居次郎  
得能弥三郎ト云者寄ニ参テ旗ヲ上候処長門探題上

野介時直彼ニ打負テ行方ヲ不知落行候シ時四国勢悉  
土居得能ニ属シテ既ニ大船ヲ揃ヘテ是ヘ御迎ニ可レ参共聞【21ウ】

候亦先京都ヲ可レ責共申候御聖運開ルヘキ時已ニ到ヌト  
覚候義繩カ当番ノ間ニ忍ニ御出候テ千波湊ヨリ  
御船ニ被召出雲伯耆問何ノ浦ヘモ風ニ随テ御船ヲ寄ラ  
レ可レ去ルスル武士ヲ御憑候テ且御待候ヘ義繩乍レ恐責奉  
為ニ罷向躰ニテ頓テ寄ニ参候ヘシト奏申臯官女此  
由ヲ申入ケレハ主上尚モ彼カ偽テヤ申ラント思召臯問義繩  
カ志程ヲ能々伺御覽セラレン為ニ彼官女ヲ義繩ニソ被  
レ下臯判官面目身ニ余リテ覚臯上叡愛已甚カリ

ケレハ弥忠烈ノ志ヲソ顕臯主上サテハ余モ相違非シト被思【22オ】  
召ケレハ或夜ノ宵ノ紛ニ三位殿御局ノ御産ノ夏近タリトテ  
御所中ヲ御出有由ニテ主上御輿ニ召レ六条少将忠顕朝  
臣斗ヲ召具セラレテ潜ニ御所ヲソ御出有臯此躰ニテハ人  
ノ恠可レ申上駕輿ノモ無レハ御輿ヲハ被止テ忝モ十善  
天子玉趾〔在御ハダシノコト也〕ヲ草鞋〔在サウアイ〕ノ塵ニケカサ  
レテ泥土ノ地ヲフマセ給臯コソ

浅増ケレ比ハ二月廿三日ノ夏ナレハ月待程ノ暗夜ニ其所トモ  
不知遠野ノ道ヲタトリテ歩セ給ヘハ今ハ遙ニ思召タレト跡成  
山ハマタ瀧ノ響ノ風ニ聞ル程ニ若追懸奉ル夏モヤ有ン

ト恐敷思召ケレハ一足モ先ヘト御心斗ハ進共何習セ給ヘキ〔ル〕道  
ナラ子ハ夢路ヲタトル心地シテ唯一所ニノミ、御セ給ヘハハ奈何  
ト思召煩テ忠顕朝臣御手ヲ引御腰ヲオシテ今宵何ニ  
モシテ湊辺迄ト御心ヲヤリ給ヘ共心身共ニ疲レ終テ野徑ノ露ニ徘徊

御ス夜イタフ深ニケレハ里遠カラヌ鐘声月ニ和シテ聞臯ヲ  
道ノ指南ニ尋ント忠顕朝臣或家ノ門ヲタ、キ千波湊ヘハ  
何方ヘ行ソト被問ケレハ内ヨリ恠氣成男一人出向テ主上ノ  
御分野ヲ見奉リ臯カ無心田夫野人ナレ共何トナク哀敷  
ヤ思ケン千波湊ヘハ是ヨリ纔五十町計ニテ候ヘ共道南北  
ヘ別テ何様ニ御迷候ヌト存候ヘハ御道指南仕候ハント申テ  
主上ヲ軽タト負參ラセテ程無千波湊ヘソ令レ着給臯  
此ニテ時ウツ鼓ノ声ヲ聞ケハ夜末五更ノ始也此道ノ案内  
者仕タル男甲斐々々敷湊中ヲ走廻テ伯耆国ヘ漕渡ル  
商人船ノ有臯ヲ兎角語テ主上ヲ屋形ノ中ニ乘進ラセ  
其後ニ暇申テソ留臯此男誠只人ニ非サリ臯ニヤ君  
御一統ノ御時尤抽賞可有トテ國中ヲ尋ラレ臯ニ我コ  
ソ其ニテ候ヘト申者遂ニ無リ臯夜モ已ニ明ケレハ船人  
纜ヲトキテ順風ニ帆ヲ揚湊外ニ漕出ス船頭主上ノ御  
分野ヲ奉見テ只人ニテハ渡セ候ハシトヤ思ケン屋形前ニ畏テ  
中臯ハ彼様ノ時御船ヲ仕テ候コソ我等カ生涯ノ面目  
ニテ候ヘハ何所ノ浦ヘ寄ヨト御誕ニ随テ御船ノ楫ヲ仕候ヘシト  
申テ誠他夏モ無氣成氣色也忠顕朝臣是ヲ聞給テ隱  
テハ中々悪リヌト被思ケレハ此船頭ヲ近ク呼寄テ是程  
推シ当ラレヌル上ハ今ハ何ヲカ隠ヘキ屋形中ニ御坐有コソ日  
本国ノ主忝モ十善ノ君ニテ渡ラセ給ヘ汝等モ定聞及ヌラ  
ン去年ヨリ隱岐判官カ館ニ推籠ラレテ御座有ツルヲ忠  
顕盗出奉タル也出雲伯耆問ニ何所ニテモ可レ其スル泊ヘ急  
御船ヲ着下參ラセヨ御運若開セ給ハ、必汝ヲ侍ニ申成テ  
所領一所ノ主ニ可レ成ト被レ仰ケレハ船頭誠嬉氣成氣色ニ  
テ取楫面楫取合片帆ニ掛テソ馳タリ臯今ハ海上二三  
十里モ過ヌラント思フ処ニ同追風ニ帆ヲ掛タル船十艘計出

【22ウ】

【23オ】

【23ウ】

【24オ】

【24ウ】

【25オ】

【25ウ】

雲伯耆ヲ差シテ馳来レリ筑紫船カ商人船カト見ハ其ニモ非ラ「スシ」テ隱岐ノ判官清高カ主上ヲ追参スル船ニテソ有鼻船頭見レ之角テハ叶マシ是ニ御隠候ヘト申テ主上ト忠顕朝

臣トヲ船底ニ宿シ進ラセテ其上ニ相物(餐<sup>アイモノ</sup>)トテ乾タル魚ノ入タル俵ヲ執積テ水主楫取其上ニ立並テ櫓ヲソ押タリ梟

去程ニ追手ノ船一艘御座船ニ追付テ屋形中ニ乗移リ【24ウ】此彼風戻ケレ共見出奉ラスサテハ此船ニハ不被レ召梟若佐キ船ヤ通ツルト問ケレハ船頭今朝卯刻ニコソ千波湊ヲ出候ツル船ニ京上臈ト覺テ冠トヤラン着タル人立帽子着タル

人二人令レ乗給テ候ヒツレ其船ハ今五六里モ先立候ヌラント申ケレハサテハ疑モナキ事也早船ヲ、セトテ帆ヲ引楫ヲ直サセケレハ此船頓テ隔リテ今ハ角ト心安思ヒ跡ノ波路ヲ

顧レハ亦一里斗有テ追手ノ船百余艘御座船ヲ目懸テ鳥ノ飛カ如ク追懸奉ル船頭見レ之帆下ニ楫ヲタテ万里ヲ一時ニ渡ント声ヲ帆ニ揚押ケレ共時節風緩ミ塩向テ御

船更ニ進ス水主楫取奈何ント惘<sup>モトス</sup>梟間主上船底ヨリ御出有テ膚御守ヨリ仏舍利ヲ一粒執出サセ給テ竹葉

ニ乗セテ海上ニソ被レ浮鼻龍神是ヲ納受ヤシタリケン海上俄風替テ御座船ヲハ東ヘ吹送り追手船ヲハ西ヘ吹戻

サテコソ主上ハ虎口ノ難ヲ御遁有リ御船ハ時ノ間ニ伯耆ノ国那和湊ニ着ニケレ六条ノ少将忠顕朝臣一人忍テ先船ヨリ下給テ此辺ニハ何成者カ弓矢取テ人ニ被レ知タル者有ソト

被レ問ケレハ道行人立<sup>ヤスライ</sup>御テ此辺ニハ那和ノ又太郎長年ト申者コソ其身指テ名有武士ニテハ候ハ子共家富、一族広ク【25ウ】

シテ心高有者ニテ候ヘトソ語申梟忠顕朝臣能々其子細ヲ尋聞テ頓テ勅使ヲ立テ被レ仰梟ハ主上隱岐判官カ館ヲ御逃有テ今此湊ニ御座有長年カ武勇ノ夏

兼テ上聞ニ達スル間御憑可有由ヲ被レ仰出也被レ憑参スヘキヤ否ヤ速ニ勅答ヲ可申トソ被レ仰タリ梟那和又太郎ハ時節一族ヲ呼聚テ酒飲テ居タリ梟カ此由ヲ承

リテ案煩タル気色ニテ兎モ角モ申得サリ梟ヲ舍弟小太郎左衛門尉進出テ申梟ハ古ヨリ今ニ到迄人ノ所望

ハ名ト利トノ二也我等忝モ十善ノ君ニ被レ憑参セテ尸ヲ軍門ニ曝其名ハ後代ニ貽ン夏生前ノ思出死後ノ名譽

タルヘシ只一筋ニ想定サセ給ヨリ外ノ儀可有共存候ハスト申ケレハ又太郎ヲ始トシテ当座ニ候梟一族共廿余人皆此儀

ニ同シテ梟去ハ頓テ合戦ノ用意候ヘシ定テ追手共跡ヨリ懸候ラン長年主上ノ御迎ニ参リテ直ニ船上山ヘ入参セ

候ハン方々ハ頓テ打立テ船上ヘ御参候ヘシト云捨テ鎧一縮シテ走出レハ一族五人腹当取テ肩ニ投掛々々道々高

紐<sup>ヒキシメ</sup>メテ共ニ御迎ニソ参梟俄<sup>マドイ</sup>夏ニテ御輿ナトモナカリケレハ長年力着タル鎧ノ上ニ荒薦ヲ纏主上ヲ負イ参ラセ【26ウ】

鳥之飛カ如ニシテ船上ヘ入奉ル長年近辺ノ在家ニ所<sup>ニ</sup>有ノ米穀ヲ一荷宛運<sup>ツ</sup>上タラン者ニハ錢ヲ五百ツ、取スヘシト触タリ梟間時程二人夫六千人出来シテ我不レ劣ト

持送ル間一日カ中ニ兵糧五千余石運テ梟其後家中ノ財宝悉人部百姓ニアタヘテ己カ館ニ火ヲ懸其勢

五十騎ニテ船上ニ馳聚ル皇居ヲ警固仕ル長年カ一族ニ那和七郎ト云梟者殊武勇ノ謀有ケレハ白布五百端ニテ旗ヲ拵ヘ松葉ヲ焼テ煙ニフスヘ近国ノ武士共ノ家

々ノ文ヲ書テ此ノ梢彼ノ峯ニ立置タリ此旗共嶺嵐ニ【27オ】吹レテ陣々ニ飄梟様山中ニ大勢充滿タリト見<sup>テ</sup>夥

船上合戦事

同廿九日佐々木隱岐判官同彈正左衛門尉其勢三千余騎

ニテ押寄タリ此船上ト申ハ北ハ大山ニ続テ而モ峙<sup>ソノハタチ</sup>タリ三方ハ地低<sup>サカ</sup>岸懸<sup>カ</sup>リテ白雲腰ニ廻リ然モ亘急<sup>ニ</sup>シテ俄拵タル城ナレハ末堀<sup>マ</sup>ノ一所モ掘ス屏ノ一重モ不<sup>レ</sup>塗只所々ニ山木ノ枝ヲキリテ逆木ニヒキ坊舎ノ薨ヲ破テ搔楯<sup>カイダテ</sup>ニカケル計也寄手三千余騎坂中迄責上テ城中ヲキト向

上レハ松柏生繁テ最深キ木陰ニ勢ノ多少ハ知子共峨【27ウ】

峨タル山ノ高キ峯ニ家々ノ旗四五百流雲ニ翻リ日ニ映シテ見タリサテハ早近国ノ勢共悉馳参タリ梟此勢計ニテハ難<sup>ズ</sup>責トヤ思ケン寄手皆心ニアヤフミテ進不<sup>レ</sup>得城中ノ勢共ハ敵ニ勢ノ分際ヲ見セシト木陰ニ縫<sup>ヌワリ</sup>伏テ時々射手ヲ出シ速矢ヲ射サセテ日ヲ暮ス処ニ一方寄手佐々木彈正左衛門尉遙ノ麓ニ扣タリ梟カ何方ヨリ射共知<sup>ズ</sup>流矢下<sup>ツ</sup>リ右ノ眼ヲ射貫レテ矢庭ニ伏テ死ニ梟依<sup>レ</sup>之其手ノ兵五百余騎色ヲ失テ戦ヲセス佐渡前司ハ百余騎ニテ搦手ヘ向タリ梟カ俄ニ旗ヲ卷背ヲヌイテ降参<sup>ズ</sup>隱岐【28オ】

判官ハ尚彼様ノ叟ヲモ不知搦手ノ勢定テ今ハ責近キヌラント得意テ一木戸口ニサ、ヘテ悪手ヲ入替々々々時移マテコソ責タリケレ日巳ニ西ノ山端ニ隱ナントシ梟時俄天搔曇風吹布テ雨ノ降叟車軸ノ如ク雷ノ成事

山ヲ碎カ如シ寄手是ヲ恐惶テ此彼ノ木陰ニ立寄テ向居タル処ニ那和又大郎長年子息大郎左衛門長重次男小次郎長生射手ヲ左右ニ進テ散々ニ射サセ敵ノ楯ノ端ノ所<sup>レ</sup>動ヲ得<sup>レ</sup>賢<sup>ト</sup>拔烈テ打テ懸ル追手ノ寄手一千余騎谷底ヘ皆捲落サレテ己カ太刀刀ニ貫レ命ヲトス者【28ウ】

其数ヲ不知隱岐判官計ハ辛<sup>キ</sup>命ヲタスカリテ小船一艘ニ執乘<sup>リ</sup>本国ヘ逃帰ルヲ国人何<sup>イッ</sup>シカ心替シテ津々湊々ヲカタメテ彼ヲ相待梟間波ニマカセ風ニ随テ越前ノ敦賀

ヘ漂寄タリ梟カ幾程無シテ六波羅没落ノ時江州番馬ノ辻堂ニテ腹搔切テ失ニ梟世澆季ニ成ヌト云共天理モ未有<sup>ズ</sup>梟ニヤ余<sup>リ</sup>ニ君ヲ奉<sup>レ</sup>惱<sup>ス</sup>梟隱岐判官カ卅余ケ日ノ間ニ亡<sup>ヒ</sup>果テ結局首ヲ軍門ノ幢<sup>ハタケ</sup>ニ被<sup>レ</sup>懸梟コソ不思議ナレ主上隱岐国ヨリ還幸成テ船上ニ御座有ト聞シカハ国々ノ兵共ノ馳参夏引<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>切先一番ニ出雲ノ守護塩冶判【29オ】

官高貞千余騎ニテ馳参ルニ番富士名判官五百余騎ニテ隱岐国ヨリ参着<sup>ズ</sup>其後浅山次郎八百余騎金持ノ一党三百余騎大山衆徒七百余騎搥テ出雲伯耆因幡三ヶ国ノ間ニ弓矢ニ扔<sup>タツサツ</sup>ル程ノ武士共ノ参サル者ハ無リ梟不<sup>レ</sup>是<sup>ル</sup>石見国ニ沢三角ノ一族等安芸国ニ熊谷小早川ノ者共美作国ニ菅家ノ一族江見渋谷備後国ニハ江田広沢宮主吉備中国ニ新見成合那須三村小坂河村真壁等備前国ニ大富太郎範知二郎親詮和田備後ノ次郎範長村城五郎左衛門尉範貞中吉美濃権介助重【29ウ】

和氣弥次郎季経石生彦三郎其外今木藤井児嶋ノ者共此外四国九州ノ兵迄モ聞伝々々ニ我先ニト馳参梟間其勢船上山ニ居余テ四方ノ麓二三<sup>三</sup>里ハ木本草陰迄モ不<sup>レ</sup>人ト云所ハ無リケリ

太平記卷第七【30オ】

(卷第八)

摩耶城合戦事付酒辺瀬川合戦事

三月十二日京軍事

於禁裏御修法事付西園合戦事

山門衆徒寄京都事

四月三日京軍事付妻鹿孫三郎事

千種殿京責事付西山炎上事

太平記卷第八

摩耶城合戦事付酒辺瀬川合戦事

〔先帝已船上ニ臨幸成隠岐判官清高合戦ニ打負後近国武士共馳参由出雲伯耆ヨリ早馬頻並ニ打テ六波羅ニ告タリケレハ事已ニ珍事也ト聞人色ヲ失ヘリ又赤松次郎入道円心〕

西園ノ敵撰津国摩耶城ニ執上テ兵庫湊川ニ関ヲ【1オ】

居タリト聞シカハ兩六波羅大ニ騷テ〔都近所ニ敵ノ足ヲ溜サセテハ叶マ

シ先推寄テ赤松ヲ対治セヨトテ〕佐々木〔近江〕判官時信〔小田〕常

陸前司時朝〔知〕四十八ヶ所ノ簷屋本在京人七十三人并ニ園

城寺ノ衆徒五百余人彼此都合七千〔八百〕余騎ヲ摩耶ノ城ニ差

下サル此敵共ハ楚ノ陣涉カ亡秦ノ弊ニノツテ山東ニ越シ

カ如シ誠ニ義ニアタリ節ニ死スル心ハ余モアラシト寄手ミナ

思悔テ山ノ案内ヲモ不レ問勢ノ手配ヲモ為ス我先ニトソ

寄タリ梟城ニ楯籠ル所ノ勢共飽迄野戦ニナレテ時ノ虧〔左注カケ〕

盈〔左注ミツル〕ヲ見ル事ヲ得タル者共也ケレハ足輕ノ射手ニ二百人ヲ

麓ヘクタシ遠矢少々射サセテ次第ニ引上梟ヲ付ト【1ウ】

ハ不レ知寄手乗レ勝テ五千余騎指モ嶮サカキ南坂ヲ人

馬ニ息ヲモ統セス採ニ採テソ上タリ梟此ノ山ニ登ルニ七曲ト

テ嶮ク細キ道有此ニ到テ寄手スコシ登煩テ支タリ梟

処ヲ赤松三男帥ノ律師則祐飽間ノ九郎左衛門尉光

泰南ノ尾崎ヘ低下テ矢種ヲ不レ惜散々ニ射梟間

寄手スコシ射癱イロメキラレテ互ニ人ヲ楯ニナシテ其陰ニ隠

ント映イロメキ梟氣色ヲ見テ赤松ノ信乃守範資同筑前守

貞範佐用上月小寺頓宮ノ者共五百余人鋒ヲナラ

ヘテ大山ノ崩ルカ如ク二尾ヨリ打出タリ梟間寄手跡ヨ【2オ】

リ挽立テ返セタ々ト励トモ更ニ不聞入ニ我先ニト引返ス或ハ

其道深田ニシテ馬蹄膝ヲヌ〔ス〕キ或荊蕪生ノ茂テ道コ

トニ難所ナレハ返ントスルモ不レ叶防トスルニ便ナシ去ハ摩耶山ノ

麓ヨリ牟古〔武庫〕川ノ西ノ端マテ道三里カ間ハ馬上カ上ニ

重死テ行人道ヲ去合ス向時七千余騎ト聞エシ六波羅

勢僅ニ千騎ニモ不レ足シテ引返ヌト聞ケレハ六波羅ノ周

章斜ナラス雖イハトモ然敵近国ヨリ越テ付従タル勢其マテ

多共聞子ハ縦一度二度勝ニノル事有共何程ノ衰カ

可レ有ト敵ノ分際ヲ推量シテ挽〔些〕共機ヲハ失ハス落行勢【2ウ】

ヲ遮留テ六波羅勢ハ尚瀬川ノ宿ニ陣ヲ取テソ居タリ梟

〔此所ニ備前国ノ地頭御家人大略敵ニ成ヌト聞ケレハ摩耶城ヘ勢ノ重ヌ

先ニ討手ヲ下セトテ同二月廿八日又一万余騎ヲ差下サル〕

赤松入道聞レ之ヲヨソ勝軍ノ利謀ト不意ニイテ、大ニ敵ノ氣

ヲシノキ須臾ニ反化シテ只先ニスルニハ不レ如トテ三千余騎ヲ

卒シ摩耶城ヲ出テ、久々智酒辺ニ陣ヲトル三月十日

六波羅勢重テ瀬川ニ着ヌト聞ケレハ合戦ハ明日ニテ

ソ有スラント赤松少シ油断シテ一急雨ノ過梟程物具ノ

露ヲホサント僅成在家ニ籠入テ雨ノ晴間ヲ待梟処

ニ尼崎ヨリ〔船ヲ留テ上ケル阿波〕小笠原三千余騎ニテ推寄タリ赤松

五十騎

ニテ寄ヲハナレテ闘イ梟力大敵難<sup>シノキ</sup> 凌ケレハ四十七騎ハ討レテ

【3オ】

父子六騎ニソ成ニ梟六騎ノ兵共笠符<sup>シシ</sup> 鬪捨<sup>カオクリシ</sup> 大勢ノ敵ニ紛<sup>レ</sup>

テ懸廻梟間何レヲ敵トモ知リ分ス円心ハ時下<sup>サカ</sup>タル腹巻ニ

帽子冑ヲ着テ小笠原力馬ニ乗トシ梟処へ走ヨリ鎧ヲ

押テソ乗セタリ梟是ヲ敵共不<sup>レ</sup>知梟天運ノ程コソ不思議ナ

レ其後円心馬ニ打乗テ六波羅ノ者共ニ数目ヲシ敵ニ懸

ル由ニテ先ニ懸ヌケ昆湯野宿ノ東ニ寄<sup>ミカク</sup>ノ勢共ノ数千

騎扣タル中へ馳入テ恠キ命ヲ資リ梟六波羅勢ハ先日ノ

軍ニ敵ノ勇銳<sup>ヨウエイ</sup>〔左注トシ〕ヲ見ルニ小勢也ト云へ共難<sup>アサムキ</sup>欺ト思ケレハ瀬

川ノ宿ニ引カヘテ進不<sup>レ</sup>得赤松ハ亦敗軍ノ士卒ヲアツメ殿<sup>シノスライ</sup>〔左注ヨクレ〕

タ【3ウ】

ル軍勢ヲ待調エン為ニ懸ラ子ハ互ニ陣ヲヘタテ、未雌雄ヲ

決セス角テ丁<sup>テサウ</sup>壮坐<sup>ソノコ</sup>〔左注〕スカヤカナル夏也〕ニ軍旅ニツカレハ敵ニ機

ヲ奪レツヘシト

テ同十一日赤松三千余騎ヲ卒シ敵陣近ク寄テ先

事ノ牀ヲ伺見ニ瀬川宿ノ東西ニ家々ノ旗ニ三百流

梢ノ風ニ靡リテ其勢ニ三万騎モ有ラント見タリ寄ヲ

是ニ合ハ千万〔百ニシテ〕ニシテ其一ニヲモ難<sup>ト</sup>得雖<sup>レ</sup>然<sup>ト</sup>闘ハテ勝ヘキ

道ナケレハ偏ニ唯討死ト心サシテ赤松ノ筑前守貞範佐<sup>ヨ</sup>

用兵庫助範家宇野ノ能登守国頼中山ノ五郎左衛門

尉光能飽間ノ九郎左衛門尉光泰郎徒共ニ七騎ニテ小【4オ】

竹ノ陰ヨリ南ノ山へ打上テ直路ニ進タリ常陸ノ前司時朝

カ手者共見レ之楯ヲ頻ニ進テ懸カト見レハ其モ非ラテ映<sup>キ</sup>

タル気色ニ見梟間七騎ノ者共馬ヨリ飛テヨリ竹ノ一村

茂タルヲ木楯ニトリテ差詰引詰思様ニソ射タリ梟瀬

川宿ノ南北三十余町ニ沓ノ子ヲ打タル様ニ扣タル敵ナレハ

何カ外矢一筋モ可有矢比ニ懸寄タル佐々木判官カ

若党共二十六騎馬ヨリ倒ニ射落サレケレハ矢面成人

ヲ楯ニシテ馬ヲ不<sup>レ</sup>令<sup>セ</sup>射ト馬足ヲ立煩タリ是ヲ見テ平野

伊勢前司佐用上月田中小寺八木衣笠ノ若者共ス【4ウ】

ハヤ敵ハ映タルハト胡籠ヲ敲<sup>キ</sup>テ勝鬨ヲ作り七百餘騎

轡ヲ並テソ懸タリ梟大軍ノ靡ク僻<sup>クセ</sup>ナレハ前陣返

トモ後陣続ス行先狭キ難所也閑ニ挽ト云へ共聞不入

我先ニト落行梟程ニ其勢大半被<sup>レ</sup>討テ僅ニ京へソ帰梟

三月十二日京軍事

赤松入道円心ハ手負生捕ノ首三百十二宿河原ノ東ニ

切懸サセテ亦摩耶へ引返ントシ梟ヲ則祐律師進出テ申

梟ハ軍ノ利勝ニ乗トキニ北ヲ追ニ不<sup>レ</sup>如今度寄手ノ名

字ヲ聞ニ京都ノ勢ハ数ヲ尽シテ向テ候梟此勢共今四五日ハ【5オ】

長途ノ負軍ニクタヒレテ人馬共ニ物ノ用不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>立臆病神ノ

覚又先ニ統テ責ル程ナラハ何カ六波羅ヲ一戦ノ中ニ責落<sup>サ</sup>

テハ可候は大公カ兵書ニ出テ子房カ心ニ所<sup>レ</sup>秘ニテ候ハス

ヤト預儀モ無ク申ケレハ諸人皆此議ニ同シテ其夜聽

テ宿河原ヲ立チテ路次ノ在家ニ火ヲ懸ケ其光ヲ松明ニ

ナシテ挽テ行敵ニ追隨イ夜ヲ日ニ繼テ責上六波羅ニハ此ル事

トハ思不<sup>レ</sup>寄摩耶へハ大勢ヲ下ツレハ定テ敵ヲ対治シヌ

ラント心安ク被<sup>レ</sup>思テ其左右今哉ト々々ト被<sup>レ</sup>待梟処ニ寄手

打負テ引退ヌト披露ハアリテ実説ハ未<sup>レ</sup>聞何ト有夏【5ウ】

哉ラント不審端多キ処ニ三月十二日ノ申刻斗ニ淀

赤井山崎西岡卅四ヶ所ニ火ヲ懸タリ是ハ何事ソト問ハ西

国ノ敵京勢ヲ追立テ三方ヨリ寄タリトテ京中上ヲ

下へ返テ騒動ス兩六波羅是ニ驚テ地藏堂ノ鐘ヲ

ナラシ京中ノ勢ヲ被<sup>レ</sup>集ケレ共宗徒ノ兵ハ摩耶城ヨリ追

立ラレテ右往左往ニ迹隠ヌ其外ハ奉行頭人ナト被レ云テ肥

脹タル者共カ馬ニ搔乗ラレテ四五百騎馳聚タレ共皆只

忘(劇)迷ヘル計ニテ指タル義勢モ無リ梟六波羅ノ北方越後

守仲時事ノ鉢ヲ見ルニ何様生(坐)ナカラ敵ヲ帝都ニテ相待【6オ】

ン夏ハ武略ノ不レ足ニ相似タリ洛ノ外ニ馳向テ可防クトテ兩檢

斷隅田高橋ニ在京武士ニ万余騎ヲ相副テ今在家

作道西八条西ノ朱雀ノ辺ヘ差向ラル是ハ此ノ比南ノ風ニ雪キ

エテ河水岸ニ余ル時ナレハ桂川ヲヘタテ、水戦ヲ致ントノ謀

也其程ニ赤松入道円心三千余騎ヲ三手ニワカチテ久

我繩手西七条ヨリ推寄タリ追手ノ軍勢先桂川ノ西ノ

岸ニ打莅テ河向成六波羅勢ヲ見亘ハ鳥羽ノ秋ノ山風

ニ家々ノ旗翩翩シテ城南離宮ノ西門ヨリ作道四塚羅

精門東西七条口迄支テ雲霞ノ如ニ充滿タリ其而【6ウ】

此勢ハ桂川ノ前ニシテ防ゲト下知セラレツルヲ守テ河ヲハコサ

ス寄手ハ亦思外ニ敵ノ大勢成ニ思惟シテ左右無打懸

ラントモセス只兩陣互ニ河ヲヘタテ、矢戦ニ時ヲソ移梟

中ニモ帥ノ律師則祐ハ機早成若武者ナレハ馬ヲ踏放

テ陸立ニナリ矢把解テ推寛ケ一枚楯ノ陰ヨリ引詰々々散

々ニ射梟力矢戦計ニテハ勝負ヲ決セン事不レ可叶梟

ト独言シテ脱置タル鎧ヲトツテ肩ニ投掛胃ノ緒ヲシメ

馬ノ腹帯ヲ縛サセテ唯一騎岸ヨリ下ニ打下シ手綱

搔繰テ渡ントス父入道遙ニ見レ之馬ヲ懸ヨセ面ニフサカツテ【7オ】

制止梟ハ昔佐々木三郎力藤戸ヲ渡シ足利又太郎カ宇

治川ヲ渡タリシハ兼テ(ミヨ)驗ヲタテ、案内ヲ見セヨキ敵ノ無

勢ヲ目ニカケテ渡タリシ者共也河上ノ雪消ニ水増テ

淵瀬モ見ヘヌ大河ヲ曾テ案内モシラテ渡サントセハ渡

サルヘキカ縦馬勁シテ渡ル夏ヲ得タリ共彼ノ大勢ノ中

ヘ唯一騎蒐入タランニ不レ討ト云夏不レ可有天下ノ安危

必シモ此一戦ニ限ヘカラス且ク命ヲ全シテ君ノ御運ヲ待ント

思心ノ無キカト再三制止梟レハ則祐馬頭ヲ立直シ抜

タル太刀ヲ納メテ申梟ハ寄敵ニ可キ対揚ス程ノ勢ニテタニ【7ウ】

候者我ト手ヲ不レ碎共運ヲ合戦ノ勝負ニ任カセテ見候

ヘキヲ寄ハ纔ニ三千余騎敵ハ是ニ百倍セリ今闘ヲ

不レ決シテ敵ニ無勢ノ程ヲ見透サレナハ重テ闘共利不レ可

レ有去ハ大公カ兵道ノ詞ニモ兵勝之術密察ニ敵人之

機ヲ而ニ速ニ乘テ其利ニ復テ疾撃ニ其不意トイヘリ是我

カ困(雀クルシム)兵ヲモテ敵ノ強陣ヲ破謀ニテ候ハスヤト云捨テ

駿馬ニ

一鞭ヲ進漲流ル瀬枕ニ水浪ヲ立テ、ソ令レ游タル見レ之

飽間九郎左衛門尉伊東ノ大輔房河原林ノ六郎木

寺相模房宇野能登守五騎烈テ颯ト打入り宇野【8オ】

ト伊東トハ馬勁カリケレハ一文字ニ流ヲ切りテ渡ル木寺相模

ハ逆カ卷テ浪ニ馬ヲハナレテ胄ノ天穴計僅ニ浮テ見梟力浪上

ヲヤ游タリケン水底ヲヤ潜タリケン人ヨリ先ニ渡着テ河ノ

向ノ流洲ニ鎧ノ水ヲ滴テソ立タリ梟彼等五人カ振舞

ヲ見テ尋常ノ者ニ非トヤ思ケン六波羅勢ニ二万余

騎人馬東西ニ僻易シテ敢テ懸合セントスル者一人モナシ

刺楯端混ニ成テ映巨ル所ヲ見テ先懸ノ寄討スナ烈

ケトテ信乃守範資筑前守貞範真先ニ進メハ佐

用上月宇野柏原ノ兵共三千余騎一度ニ颯ト打入テ【8ウ】

馬筏ニ流ヲ関上タレハ逆水岸ニ余リ流十方ニ別テ元ノ淵

瀬ハ中々ニ爪タニ浸ス成ニ梟三千余騎ノ兵共向岸ニ打

上リ死ヲ一挙ニ輕セント進勇メル威ヲ見テ六波羅勢

不レ叶トヤ思ケン未レ關先ニ楯ヲステ旗ヲ卷テ作道ヲ北ヘ

東寺ヲ指シテ挽モ有竹田河原ヲ上リニ法性寺大道〔路〕落  
モ有其道二十余町ニハ捨タル冑甲地ニ滿テ馬蹄ノ  
塵ニ埋没ス去程ニ西七条ノ手高倉ノ少將子息左衛門佐田中  
小寺菅家衣笠ノ兵共モ早京中へ責入タリト見テ

大宮猪熊堀川油ノ小路ノ辺五十余ヶ所ニ火ヲ懸タリ【9オ】

又八条九条ノ間ニモ戦有ト覚テ汗馬東西ニ馳違イ関ノ  
声天地ニ響キ巨レリ只大(天)イノ三災一時二起テ三界悉ク劫  
火ノ為ニ焼ケ失ルカト疑ル京中ノ合戦ハ夜半計ノ事ナレハ日

ヲ刺共知又暗ニ鬨声計彼此ニ聞エテ勢ノ多少モ軍立ノ様  
躰モ見分サレハ何所へ何ト向テ戦ヲスヘシ共不覚京白川ノ

勢ハ先六条河原ニ馳集テ只忘然タル躰ニテ扣タリ日  
野中納言資名同左大弁ノ宰相資明二人同車シテ内裏

へ參リ給イタレハ四門徒ニ開テ警固ノ武士ハ一人モ無シ主上南殿  
出御成テ誰カ在ト召有共衛府諸司官蘭台金馬ノ司モ何地へカ行タ

リケン勾当ノ内侍御上童一人ヨリ外ハ御前ニ仕者モ無リケ  
リ資名資明二人御前ニ參テ官軍戰弱シテ逆徒洛

中ニ乱入候又彼様ニテ御坐候者賊徒差違テ御所中へモ  
參ヌト覚へ候念キ三種ノ神器ヲ先立テ六波羅へ行幸

成候へト勸申サレケレハ主上臆テ腰輿ニ被レ召テ二条河  
原ヨリ六波羅へ臨幸成堀川大納言三条源大納言鷲

尾中納言坊城ノ宰相以下月卿雲客二十余人路次  
ニ參合テ供奉シタテマツル是ヲ聞食及テ院法皇春宮

皇后梶井二品親王迄皆六波羅へト御幸行啓成臯【10オ】  
間供奉ノ雲客卿相軍勢ノ中ニ交テ警蹕ノ声頻ナ

レハ是サへ六波羅ノ仰天一方不レ成俄ニ六波羅ノ北方ヲ  
仙洞皇后トナス事ノ躰騒カリシ分野也夜ニ入レハ兩六波羅

ハ七条河原ニ打立テ近ツク敵ヲソ相待臯此大勢ヲ見  
テ敵モ追カ目ニ余テヤ思ケン此彼ニ走散テ火ヲ掛鬨ヲ

作ル計ニテ同所ニ扣タリ兩六波羅見レ之敵ハ何様小勢  
也ト覺ルソ馳廻テ追払へトテ隅田高橋二三千余騎ヲ

相副テ八条口へ差向ラレ河野九郎左衛門陶山ノ二郎ニ  
二千余騎ヲ加(差副)テ蓮華王院へソ被向臯陶山河野ニ向テ【10ウ】

申臯ハ何共無取集メ勢ニ交テ戦ヲセハ恣足纏ニ成テ  
懸ケ挽キ更ニ自在成マシ誘ヤ六波羅殿ヨリ差副ラレタル

勢ヲハ八条河原辺ニ扣サセテ鬨声ヲ上サセ我等ハ手  
勢計ヲ引勝テ蓮華王院ノ東ヨリ敵ノ中へ蒐入テ蛛

手十文字ニ懸乱シ弓手馬手ニ相付テ犬追物ノ射ニ射テ  
与候ハント申ケレハ河野可レ然ト同シテ外様ノ勢二千余

騎ヲハ塩ノ小路道場ノ前へ差遣シ河野カ勢三百余騎陶山  
カ勢百五十騎引分テ一ニナリ蓮華王院ノ東へソ廻臯相

図ノ程ニモ成ケレハ八条河原ノ勢鬨声ヲ揚タルニ敵是ニ立【11オ】  
合セント馬ヲ西頭ニ立テ、相待所へ陶山河野カ四百余騎思寄

ヌ後ヨリ鬨ヲト、作テ大勢ノ中へ蒐入東西南北ニ懸破テ敵  
ヲ一所ニ打寄ラセズ追立々々攻メ戦フ河野ト陶山トハ一所ニ合テハ兩

所ニ別レ兩所ニ別テハ一所ニ合七八度カ程ノ揉タリ臯長  
途ニ疲タル陸立ノ武者騎馬ノ兵ニ懸惱サレテ討ル、者其

數ヲ不知手負ヲステ道ヲタエテ散々ニ成テ引返シ河野  
陶山迹ル敵ニハ目モ懸テ(ズ)西七条辺ノ合戦如何カ有シ心許

ナキニ誘ヤ見ントテ亦七条河原ヲ直達ニ西へ打通テ七条  
大宮ニ引カヘ朱雀ノ合戦ヲ煙中ニ見遣タレハ隅田高橋カ【11ウ】

三千余騎高倉ノ右衛門小寺衣笠カ二百(千)余騎ニ懸立ラレ  
テ馬足ヲソ立煩タル河野見レ之角テハ何様寄被討ヌト覺

ル誘ヤ打懸ラント云臯ヲ陶山止テ申臯ハ此陣ノ戰未雌雄

【9ウ】

ハ七条河原ニ打立テ近ツク敵ヲソ相待臯此大勢ヲ見  
テ敵モ追カ目ニ余テヤ思ケン此彼ニ走散テ火ヲ掛鬨ヲ

作ル計ニテ同所ニ扣タリ兩六波羅見レ之敵ハ何様小勢  
也ト覺ルソ馳廻テ追払へトテ隅田高橋二三千余騎ヲ

相副テ八条口へ差向ラレ河野九郎左衛門陶山ノ二郎ニ  
二千余騎ヲ加(差副)テ蓮華王院へソ被向臯陶山河野ニ向テ【10ウ】

申臯ハ何共無取集メ勢ニ交テ戦ヲセハ恣足纏ニ成テ  
懸ケ挽キ更ニ自在成マシ誘ヤ六波羅殿ヨリ差副ラレタル

勢ヲハ八条河原辺ニ扣サセテ鬨声ヲ上サセ我等ハ手  
勢計ヲ引勝テ蓮華王院ノ東ヨリ敵ノ中へ蒐入テ蛛

手十文字ニ懸乱シ弓手馬手ニ相付テ犬追物ノ射ニ射テ  
与候ハント申ケレハ河野可レ然ト同シテ外様ノ勢二千余

騎ヲハ塩ノ小路道場ノ前へ差遣シ河野カ勢三百余騎陶山  
カ勢百五十騎引分テ一ニナリ蓮華王院ノ東へソ廻臯相

図ノ程ニモ成ケレハ八条河原ノ勢鬨声ヲ揚タルニ敵是ニ立【11オ】  
合セント馬ヲ西頭ニ立テ、相待所へ陶山河野カ四百余騎思寄

ヌ後ヨリ鬨ヲト、作テ大勢ノ中へ蒐入東西南北ニ懸破テ敵  
ヲ一所ニ打寄ラセズ追立々々攻メ戦フ河野ト陶山トハ一所ニ合テハ兩

所ニ別レ兩所ニ別テハ一所ニ合七八度カ程ノ揉タリ臯長  
途ニ疲タル陸立ノ武者騎馬ノ兵ニ懸惱サレテ討ル、者其

數ヲ不知手負ヲステ道ヲタエテ散々ニ成テ引返シ河野  
陶山迹ル敵ニハ目モ懸テ(ズ)西七条辺ノ合戦如何カ有シ心許

ナキニ誘ヤ見ントテ亦七条河原ヲ直達ニ西へ打通テ七条  
大宮ニ引カヘ朱雀ノ合戦ヲ煙中ニ見遣タレハ隅田高橋カ【11ウ】

三千余騎高倉ノ右衛門小寺衣笠カ二百(千)余騎ニ懸立ラレ  
テ馬足ヲソ立煩タル河野見レ之角テハ何様寄被討ヌト覺

ル誘ヤ打懸ラント云臯ヲ陶山止テ申臯ハ此陣ノ戰未雌雄



ヲ決サル先ニ力ヲ合セ寄ヲ助タリ共隅田高橋等カ口ノ  
悪サハ我高名ニソ云ヌラン且ク置テ事ノ様ヲ御覽セヨ敵縦  
聊勝ニ乗トモ何程ノ事カ可有トテ見物シテコソ居タリケ

レ其ル程ニ隅田高橋カ大勢僅成敵ニ追立ラレテ返サントス  
レ共叶ハス朱雀ヲ上リニ内野ヲサシテ挽モ有七条ヲ東へ京  
中へムケテ逃モ有亦馬ニ離タル者ハ心不成返合テ死ルモ有【12オ】

陶山見レ之余ニ長言シテ寄ノ弱リ為出シタランモ由無シ今ハ  
誘ヤ懸合セント申ハ河野云ニヤ及ト云俣ニ兩勢一手ニ  
成テ勝ニノレル敵ノ中へ蒐入テ時移迄ソ闘タル四武ノ衝陣(左注)ツクツカ  
ユル心也堅メヲクタクキ

百戦ノ勇氣変ニ応セシカハ寄モ手亦此陣ノ戦ニモ打  
負テ寺戸ヲ西へ引退中ニモ赤松ノ筑前守貞範帥律

師則祐兄弟ハ始桂川ヲ渡ツル時ノ合戦ニ逃敵ヲ追立  
テ続テ寄ノ無ヲモ不知只主従六騎ニテ竹田ヲ上ニ法性寺

大道へ懸通り(六条河原)打出テ六ハラノ西門ノ前ニ扣ハツクミカタ  
有直ニ兩六波羅ノ館へ蒐入シトソ待タリ梟東

寺ヨリ寄ツル勢モ早鬨負テ引返梟ト覺ヘテ東西【12ウ】  
南北ニ敵ヨリ外ハ無リ梟去ハ暫ク敵ニ紛テ寄ヲ待ント

六騎ノ人々皆笠符ヲ鬮捨テ一所ニ扣タル処ニ隅田高橋打  
廻テ何様赤松カ勢ハ尚寄ニ紛テ此中ニモ有ヌト覺ルソ河

ヲ渡ツル敵ナレハ馬物具ノ不濕ハ不可有其ヲ驗ニシテ組  
討ニ討ト喚梟間貞範モ則祐モ中々敵ニ紛レントセハ悪シカ

リヌヘシト思テ兄弟主従六騎轡ヲナラヘテヲツト叫テ敵七千  
余騎カ中へ颯ト蒐入テ此ニ称リ(彼ニ)紛レテ相鬨敵程は是レ小

勢成ヘシトハ思寄ヘキ事ナラ子ハ東西南北ニ違テ  
同侶討ヲスル事数刻也大敵ヲ計ルニ威久カラサレハ郎【13オ】

徒(等)四騎ハ皆討レテ筑前守ハ懸隔タリヌ則祐唯一騎ニ成

テ七条ヲ西へ大宮ヲ下ニ落行梟ヲ印具ノ尾張守郎  
徒(等)八騎追懸テ敵ナカラ情覺タル者哉誰人ニテ御坐ソ  
御称候へト問ケレハ則祐馬ヲ閑ニ打テ身不肖ニ候へハ

称候トモ御存知候へカラス只頸ヲトリテ人ニ見セラレ候へト  
云俣ニ敵近ケハ返合セ敵扣レハ馬ヲ歩セ二十余町カ間敵  
八騎カ中ニ打烈テ心静ニソ落行梟西八条ノ寺ノ前ヲ

南へ打出ケレハ信濃守範資間嶋上月三百余騎羅  
精門ノ前ナル水ノ瀨ニ馬ノ足ヲヒヤシ敗軍ノ兵ヲ集ント【13ウ】  
旗打立テ扣タリ則祐是ヲ見付テ諸鎧ヲ合セテ馳加ケレ

ハ追懸テ来ツル八騎ノ敵共能敵ト見ツル者ヲ遂ニ討漏  
ヌル不レ安サヨト云声高ラカニ聞テ馬ノ鼻ヲ引返梟暫ア  
レハ七条河原西朱雀ニテ懸散サレタル兵共此彼ヨリ馳集

テ亦(三)千(余)騎ニ成ニ梟此勢ニテ今度京中へ蒐入テ鬨ハヤト  
云儀モ有ケレ共機疲馬疲ケレハ後日ニコソ亦寄メトテ

山崎ヲ差テ引退(赤松其兵ヲ進七条辺ニ)又時声ヲ上タリケレトモ六波  
羅勢六千余キ六条ノ院ヲ後ニアテ、追返ツ攻合タリケルカクテ軍ノ勝負

如何有覺ケル処ニ河野陶山勢大宮下リ後後裏ント廻ケルニ後陣破  
ラレテ寄手若干討レニケレハ赤松小勢ニ成テ山崎ヲサシテ引退(河

野ト陶山トハ(勝ニ乗テ)作道辺迄追懸ケルカ赤松動スレハ取テ返ントス  
ル勢見軍ハ是迄ソ長追ナセソトテ鳥羽殿ノ前ヨリ引返ス(所々ニテ

虜リ廿余人)

討取タル敵ノ首七  
十三取(付ニ)ツケ鋒ニツナヌキテ朱ニ成テ六波羅へ馳參主上

ハ御簾ヲ捲セテ睿覽有兩六波ハ敷皮ニ坐シテ檢知セ【14オ】  
ラル兩人ノ振廻何モノ事ナレ共殊更今日ノ合戦ニ方々手

ヲ摧キ命ヲ捨テ給ハスハ不レ叶トコソ見テ候ツレト再三  
被レ感テ賞翫殊ニ甚シ頓テ其時臨時ノ宣下有テ

河野ノ九郎ヲ對馬守ニ被レ成テ御釵ヲ被レ下陶山ニ二郎ヲ備

中守ニ被<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>テ寮<sup>レ</sup>ノ御馬ヲ給ケレハ是ヲ聞見ル人コトニ哀

弓矢執テノ面目ヤト或ハ猜<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>或ハ羨<sup>レ</sup>夫<sup>ヲ</sup>其名天下ニ被<sup>レ</sup>知

タリ軍散シテ翌日ハ隅田高橋京中ヲ走廻リ此彼ノ堀溝

ニ倒<sup>レ</sup>伏<sup>シ</sup>タル手負死人ノ頸共ヲ取集テ六条河原ニ懸置

タルニ其數八百七十三有敵是迄多ハ不<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>討ケレ共戰モ 【14ウ】

セヌ六波羅勢共我<sup>レ</sup>高名シタリト云ントテ在家町人ナトノ

頸ヲ借<sup>カ</sup>頸<sup>ニ</sup>シテ様々ノ名ヲ書付テ出タリ梟首共也此中

ニ赤松入道円心ト札ヲ付タル首五<sup>ツ</sup>有<sup>何</sup>ヲ其共見知タル

人無ケレハ同<sup>ツ</sup>楯<sup>ニ</sup>ソ<sup>ノ</sup>掛タリ梟京童<sup>ハ</sup>見<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>首ヲ借タル人

ハ子ヲツケテ可<sup>レ</sup>返<sup>レ</sup>赤松入道ノ分身<sup>シ</sup>敵ノ尽<sup>ヌ</sup>相成ヘシト口

々ニコソ笑イケレ

於禁裏御修法事<sup>村西岡合戰事</sup>

此比四海大ニ乱テ兵火天ヲ隱セリ(翳) 聖王辰ヲヨヒ(負イ) テ春秋

安キ時無ク武臣牙ヲ立テ、旌旗閑成日ナシ是法威ヲ 【15オ】

モテ逆乱ヲ靜スハ靜謐其期有ヘカラストテ詩寺諸山ニヨホ

セテ様々ノ大法秘法ヲソ被<sup>レ</sup>修梟梟井二言品親王ハ聖主

ノ連枝山門ノ座主ニテ御坐ケレハ禁裏ニ壇ヲ構ヘテ仏

眼法ヲ令<sup>レ</sup>行給仙洞ニシテハ裏辻慈<sup>ツ</sup>僧<sup>ツ</sup>正<sup>ツ</sup>葉<sup>ツ</sup>師<sup>ツ</sup>法<sup>ツ</sup>ヲ

ソ被<sup>レ</sup>行梟武家亦山門南都園城ノ衆徒ノ怨<sup>心</sup>ヲトリ

靈鑑<sup>ノ</sup>加護ヲ仰ンカ為<sup>二</sup>国々ノ庄園ヲ寄進シ種

々ノ「神宝ヲ奉テ」祈精ヲ被<sup>レ</sup>致シカ共公家ノ政道モ正カラス武家ノ

積<sup>キ</sup>悪禍ヲ招シカハ祈共神モ享<sup>ス</sup>語共人靡ス只日追テ

国々ヨリ急ヲツクル事間ナシ去三月十二日ノ合戦ニ赤松小 【15ウ】

勢ニ討成レテ山崎ヲ差テ落行シヲ頓テ追懸討手ヲタ

二下タラハ敵足ヲ不<sup>レ</sup>積<sup>カ</sup>リシヨ今ハ何<sup>カ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>ト</sup>テ被

レ閣<sup>ニ</sup>シニヨリ敗軍ノ兵亦此彼ヨリ馳集テ程無<sup>ク</sup>大勢ニ成ケ

レハ赤松中ノ院、左少(イ中) 将能貞(イ貞能) ヲ執立テ聖護院宮ト号シ

山崎八幡二陣ヲ取剩<sup>レ</sup>河尻ヲ差塞テ西国往<sup>レ</sup>反ノ道ヲ

留依<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>洛中ノ商買ト、マリテ士卒皆<sup>レ</sup>輜<sup>漕</sup>ノ資ニクル

シメリ兩六波羅聞<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>赤松一人ニ洛中ヲ被<sup>レ</sup>惱<sup>テ</sup>士卒身ヲ

クルシメル事コソ安カラ子去十二日ノ合戦ノ躰ヲ見ルニ敵其迄

大勢ニテハ無リ梟者ヲ云益無ク聞怖テ敵ヲ辺土(境)ノ間 【16オ】

二聞コソ武家ノ恥辱ナレ所詮今度ニヨイテハ官軍遮テ敵

陣ニ推ヨセ八幡山崎ノ兩陣ヲ責落テ賊徒ヲ河水ニ追ハ(込)ヌ其

頸ヲ執テ六波羅六条河原ニ曝ヘシト下知セラレケレハ四十八ヶ所

ノ篝屋并二本在家人其勢都合五千余騎五条河原

ニ勢揃(汰)シテ三月十五日ノ卯刻ニ山崎ヘソ被<sup>レ</sup>向梟此勢始ハ

二手二分タリ梟ヲ久我繩手ハ道細シテ兩方深田ナレハ馬

ノ懸挽モ自在不<sup>レ</sup>成トテ八条ヨリ一手ニ成テ桂川ヲ打

渡シ河嶋ノ南ヲ經テ物集女大原野ノ前ヨリソ寄タ

リ梟赤松入道聞<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>三千余騎ヲ三手ニワカツ一手ヲハ 【16ウ】

足輕ノ射手ヲ揃<sup>テ</sup>五百余騎小塩山ヘ差廻ス一手ヲハ野

伏ニ騎馬ノ兵ヲ少々交テ千余人狐河ノ辺ニ扣サス今一

手ハ浸空打物ノ衆八百余騎ヲ揃<sup>テ</sup>向<sup>テ</sup>日明神ノ後ナ

ル松原ノ陰ニソ被<sup>レ</sup>隱梟六波羅勢ハ敵是迄出合ヘシト

ハ思<sup>モ</sup>寄<sup>モ</sup>ス坐<sup>ニ</sup>深<sup>ニ</sup>入<sup>シ</sup>テ寺戸ノ在家ニ火ヲカケ先懸已ニ

向<sup>テ</sup>日明神ノ前ヲ打過<sup>キ</sup>梟処ニ吉峯岩倉ノ上ヨリ足輕

ノ野伏共一枚楯ヲ手々ニ提テ所々ノ木陰ヨリ散々ニソ射

タリ梟寄手ノ六波羅勢見<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>馬鼻ヲ並ヘテ懸散ン

トスレハ山嶮シテ登<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>広場ヘ敵ヲ帶<sup>キ</sup>出<sup>テ</sup>討<sup>ント</sup>スレ 【17オ】

ハ敵是ヲ得<sup>レ</sup>意<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>懸<sup>能</sup>ヤ人々墓々シカラヌ野伏共

二目ヲカケテ骨ヲ折テハ何<sup>カ</sup>為<sup>セ</sup>此ヲハ只打捨テ山崎ヘ打通レト

五十余騎ノ勢ニテ思寄又向フ日明神ノ小松原ヨリ懸出テ  
大勢ノ中へ破テ入敵小勢也ト侮テ真中ニ是ヲ取コメ不

余ト闘フ処ニ田中(小寺)八木神沢ノ者共個此彼ヨリ百騎二百

騎懸出テ魚鱗ニ進ミ鶴翼ニ困ントス見レ之狐河

ニ扣タル勢五百余騎六波羅勢ノ跡ヲ追遮ント繩手

ヲツタイ道ヲタヘテ取廻臯ヲ見テ京勢共不叶ト【17ウ】

ヤ思ケン捨鞭ヲウチテ引返ス半時計ノ合戦ナレハ指モ

京勢ノ多ク被レ討タル事ハ無ケレ共堀溝深田ニ落入テ

馬物具皆執所モ無ク汚タレハ日(白)昼ニ京中へ打通臯

兵共美相モナクソ見タリ臯去ハ小路ニ立テ

見物シケル人コトニ哀サリトモ河野ト陶山トヲタニ被レ向タラ

ハ是程蓬(キタ)負ヲハセシ者ヲト笑ハヌ人社無リ臯レ京勢

此度打負テコソ向ハテ京ニ被レ残タル河野陶山カ手柄

ノ程ハイト名高ク成ニ臯レ

山門衆徒寄ニ京都ニ事【18オ】

去程ニ京都ニ合戦始テ宮方(ヤ)動(ハ)利ヲ失フ由其間有ケ

レハ大塔宮ヨリ牒使ヲ被レ立テ山門ノ衆徒ヲソ被レ語臯依

レ之三月廿六日一山ノ衆徒大講堂ノ庭ニ参合シテ僉議シ臯

夫吾山者為ニ七社応化之靈地ト作ニ百王鎮護之

藩籬高祖大師トニ開基ニ之始(ト)止觀ノ窓ノ前(ハ)雖(モ)弄(シ)

天真独朗之夜月一慈惠僧正為ニ貫頂ニ之後忍

辱衣ノ上ニ忽ニ帶ヲ魔障降伏之秋(霜)自(リ)爾(来)妖(ト)

藥(見)天(則)振(テ)法威(而)攘(レ)之(逆)暴乱(ル)国(則)借(ツ)テ(神)

力(而)退(レ)之(肆)神(号)山(王)須(有)一(点)三(点)之(深)理(山)【18ウ】

言(比)叙(一)以(ニ)仏(法)王(法)之(相)比(フ)而(今)四(海)方(乱)一(人)不(レ)安

武(臣)積(惡)ノ(余)果(テ)天(將)下(レ)誅(先)兆(其)非(無)賢(愚)共(ニ)

世(所)知(也)王(事)母(レ)監(積)門(仮)使(雖)為(ニ)出(塵)之(徒)此

時(奈)何(無)レ(尽)報(國)之(忠)早(ク)翻(シ)武(家)合(躰)之(前)非(ラ)

ト僉議シケレハ三千一同ニ尤々ト同シテ院々谷々へ皈リ即武

家追討ノ企ノ外ハ他事無シ山門已ニ来廿八日六波羅へ

可レ寄ト相触ケレハ末寺末社ノ輩ハ申ニ不及縁ニフレ

語ニ付(近)国ノ兵共ノ馳集ル(夏)雲霞ノ如シ廿七日大宮【19オ】

ノ前ニテ着到ヲ付タリ臯ニ其勢十万六千余人ト註セリ大

衆ノ習元来(大)速(無)極(所)存(成)レハ此勢ニテ京へ寄タラン

ハ六波羅余モ一堪(モ)堪(シ)聞(落)ニ(コ)ソ(為)セ(メ)ト(思)悔(左)注(コ)ナ(シ)テ(八)幡

山崎ノ寄(ニ)モ(牒)合(セ)ス(廿)八(日)卯(刻)ニ(法)勝(寺)ニ(ヨ)イ(テ)勢(揃)ア

ル(ヘ)シト(触)タリ(ケ)レハ(物)具(ヲ)モ(未)レ(為)兵(糧)ヲ(モ)仕(ハ)テ(或)ハ(今)道

ヨリ(馳)向(イ)或(ハ)西(坂)ヨリ(低)下(ル)兩(六)波(羅)懸(テ)此(事)ヲ(聞)

テ(思)ウ(ニ)山(徒)縦(イ)大(勢)也(ト)云(共)騎(馬)ノ(兵)ハ(少)ナ(カ)ル(ヘ)シ(馬)上

ノ(射)手(ヲ)揃(テ)三(条)河(原)辺(ニ)待(受)ケ(懸)開(キ)懸(合)セ(弓)手

馬(手)ニ(相)付(テ)犬(追)物(射)ニ(射)タ(ラ)ン(ス)ル(ニ)山(徒)心(ハ)猛(シ)ト(云)共(陸)

立(ニ)力(疲)レ(重)キ(鎧)二(肩)ヲ(引)レ(テ)片(時)カ(間)ニ(勞)ル(ヘ)シ(是)小(ヲ)

以(テ)大(ヲ)摧(キ)弱(ヲ)モ(テ)強(ヲ)ト(リ)ヒ(シ)ク(賢)ナ(リ)ト(相)謀(テ)七

千(余)騎(ヲ)七(手)ニ(別)三(条)河(原)ノ(東)西(ニ)陣(ヲ)取(テ)ソ(待)

懸(タル)大(衆)此(ル)ヘ(シ)ト(ハ)思(モ)不(寄)我(先)ニ(京)へ(入)テ(広)カ(ラ)ン

ス(ル)宿(ヲ)シ(メ)其(財)宝(ヲ)管(領)セ(ン)ト(志)テ(宿)札(ヲ)面(々)ニ(二)

三十(ツ)持(セ)テ(先)法(勝)寺(へ)ト(ソ)集(臯)遙(ニ)其(勢)ヲ(見)巨

セ(ハ)今(道)西(坂)古(到)下(八)瀬(敷)里(降)松(赤)山(左)注(アカ)ヤ(マ)口(ニ)扣(テ)先

陣(已)ニ(法)勝(寺)真(如)堂(ニ)ツ(ケ)ハ(後)陣(ハ)未(尚)山(上)坂(本)ニ(充)

滿(タ)リ(甲)冑(ニ)映(セル)朝(日)ハ(電)光(ノ)激(ス)ル(ニ)異(ナ)ラ(ス)旗(旗)【20オ】

ヲ(ナ)ヒ(カ)ス(嵐)ハ(龍)蛇(ノ)動(ク)ニ(相)似(タ)リ(山)上(ト)洛(中)ト(ノ)勢(ノ)多

少(ヲ)見(合)ス(ル)ニ(六)波(羅)(武)家(ノ)勢(ハ)十二(ニ)シ(テ)其(一)ニ(タ)ニ(モ)不(レ)ハ(及)

〔六波羅ヲ輒ク見下ケル山法師ノ心ノ程大様ナカラモ理也〕先陣ノ大衆法勝寺ニツイテ且ク後陣ノ勢ヲ相待梟処へ六波羅勢七千余騎三方ヨリ推寄テ天地ヲヒックカシテ関ヲ作ル大衆鬨声ニ驚テ物具ヨリ太刀ヨリ長刀トヒシメキテ執物ヲモ執不レ合其勢僅ニ千余人法勝寺ノ西門ノ前ニ出合近ク敵ニ拔テ懸ル武士ハ兼ヨリ〔巧ク〕得タル事ナレハ敵ノ懸ル時ハ馬ヲ引返テバト挽キ敵留レハ開キ合セテ後へ懸ケ廻ハ此ノ如六七度力程懸悩タリ梟間山法師【20ウ】ハ皆陸立成上ヘ重キ鎧ニ肩ヲ引レテ頓テ疲タル躰ニソ見タリ梟武士是ニ利ヲ得テ射手ヲ揃テ散々ニ射ル大衆是ニ射立ラレテ広場ノ合戦ハ不レ叶トヤ思ケン亦法勝寺引籠ントシケル処ヲ丹波国ノ住人ニ佐治ノ孫四郎ト云梟兵西門ノ前ニ馬ヲ横タヘ其比曾テ無リシ五尺三寸ノ太刀ヲ以敵三人懸ス筒切ニシテ太刀ノ少シ仰タル門ノ扉ニ当テ、推直シ尚モ〔敵ヲ〕相待テ西頭ニ馬ヲソ扣タル山徒見レ之其威ニヤ辟易シケン亦法勝寺ニモ敵有トヤ思ケン法勝寺へハ入不レ得西門ノ前ヲ北へ向テ真如堂ノ【21オ】前神楽岡ノ後ヲ二二分テ只山上ニト苴テソ引返梟爰ニ東塔南谷善智坊カ同宿ニ豪鑿豪仙トテ三塔名譽ノ悪僧有寄ノ大勢ニ引立ラレテ心不レ成北白河迄挽タリ梟カ豪鑿豪仙ヲ呼留テ申梟ハ軍ノ習トシテ勝時モ有負ル時モ在時ノ運ニヨル夏ナレハ恥ニテ不レ恥トイヘ共今日ノ合戦ノ躰山門ノ恥辱天下ノ口遊〔嘲弄〕タルヘシ誘ヤ御辺返合テ討死シ二人カ命ヲ以〔捨テ〕一山ノ恥ヲ雪ント申ケレハ豪仙云ニヤ及フ庶幾スル所也ト云テ二人引返シ法勝寺ノ北門ノ前ニ立並テ大音【21ウ】声ヲ揚テ称梟ハ是程引立タル大勢ノ中ヨリ二人返合ル

ヲ以テ三塔一ノ剛者トハ知ヘシ其名ヲハ定テ聞及ヌラン善智坊カ同宿ニ豪鑿豪仙トテ一山ニ名ヲ被レ知タル者共也我ト思ハン武士有ハ寄ヤ打物ト〔シ〕テ自余ノ輩ニ見物セサセント云任ニ四尺三寸ノ太長刀水車ニ廻テ跳懸々々火ヲ散テソ切タリ梟是ヲ討取ント相近梟武士共多ク馬ノ足ヲ薙レ青ノ鉢ヲ破レテ被レ討ニ梟彼等二人此ニ半時計支ツ、鬨ツレトモ烈ク大衆一人モ無敵ノ雨ノ降如ク射梟矢ニ二人ナカラ十余ヶ所ノ疵ヲ被テケレハ今ハ所存是【22オ】迄ソ誘ヤ冥途迄モ同道セント契テ鎧ヲヌイテ推膚又テ腹十文字ニ搔切テ同枕ニソ伏タリ梟是ヲ見梟武士共哀日本一ノ剛ノ者共カナト惜ヌ人コソ無リケレ前陣ノ軍破テ引返ケレハ後陣ノ〔勢ハ〕軍〔場〕ヲタニ不レ見シテ道ヨリ山門へ引返タ、豪鑿豪仙二人計カ振廻ニコソ尚モ山門ノ名ヲハ不レ折ケレ

四月三日京軍事付妻鹿孫三郎事

去程ニ去月十二日赤松カ合戦利無シテ引退シ後ハ武家常ニ乗レ勝テ敵ヲウツヌ数千人也ト云ヘ共四海未レ静剩ヘ亦山門尚武家ニ敵シテ大獄ニ箒ヲ焼坂本ニ勢ヲ集テ尚モ六波羅ヘ可レ寄ト聞ケレハ衆徒ノ心ヲ取ラン為ニ武家ヨリ大庄十三ヶ所山門へ寄進セラル其外宗徒ノ衆徒ニ便宜ノ地ヲ一二ヶ所ツ、祈禱ノ為トテ恩賞ニソ被レ行ケルサテコソ山門ノ衆儀心々ニ成テ武家ニ心ヲ寄スル衆徒モ多出来ニケレ八幡山崎ノ勢官軍ハ先ノ京軍ニ或ハ討レ或ハ疵ヲカウムル者多カリケレハ大半減シテ今ハ一万騎ニモ不レ足ケリサテ武家ノ軍立京都ノ形勢恐ニ不レ足ト見透テケレハ七千余騎ヲ二手ニ【23オ】分チテ四月三日ノ卯刻ニ亦京ヘソ推寄梟其一方ハ殿

法印良忠中ノ院ノ左少将宣(定)平ヲ大将トシテ伊東松田頓  
宮真木葛場(葉)ノ溢者共ヲ射手ニナシテ其勢都合  
三千余騎伏見木幡二火ヲカケテ鳥羽竹田ヨリ推  
寄ル一方ハ赤松入道円心ヲ始トシテ宇野柏原佐用  
真嶋得平ノ菅家都合三千余騎河嶋桂ノ里ニ  
火ヲカケテ西七条ヨリソ寄タリ梟兩六波羅ハ度  
々ノ合戦ニ討勝テ兵皆機ヲ揚タル上其軍勢ヲ  
カソウルニ三万騎ニ余梟間敵亦近ヌト告レ共更ニ【23ウ】  
仰天ノ気色モナシ六条河原ニ勢汰シテ靜ニ二分ヲ  
ソ被レ為梟山門今ハ武家ニ志ヲ通スト云ヘ共亦何成野  
心ヲカ存スラン油断スヘキニ非トテ佐々木判官時信常陸  
前司時朝長井縫殿助正顯三千余騎ヲ差副テ河  
合河原ヘ差向ラル去月十二日ノ軍ニモ其方ヨリ勝タリシ  
カハ吉例成リトテ河野ト陶山トニ五千余騎ヲ差副テ  
法性寺大道ヘ差向ラル林富樫カ一族嶋津小早川  
カニ(※兩)勢ニ固々ノ兵六千余騎ヲ相副テ西八条東寺  
辺ヘ向ラル東ノ加賀守加地ノ源太左衛門隅田高橋槽【24オ】  
谷土屋小笠原二七千余騎ヲ相副テ西七条口ヘ向ラル  
自余ノ兵千余騎ヲハ悪手ノ為ニ被レ残テ未六波羅ニ  
被レ置タリ二日卯刻ヨリ三方ノ兩陣同時ニ軍初テ入替  
々々攻戦寄手ハ騎馬ノ兵少クシテ陸立ノ射手多ケレ  
ハ小路々々ヲ立チ塞テ楯ノ外ヨリ散々ニ射ル六波羅勢ハ  
陸立少シテ騎馬多ケレハ懸違々々敵ヲ中ニ取籠ントス  
孫氏力千變ノ謀ト呉子カ八陣ノ法互ニ知タル道ナレハ  
共ニ破レス亦困レス只命ヲ際ノ戦ニテ更ニ勝負モ無リ  
梟終日相闘テ日巳ニ夕陽ニ及梟時河野ト陶山ト一【24ウ】  
手ニナリテ三百余騎轡ヲ並ヘテ懸タリ梟ニ木幡

ノ寄手三千余騎足ヲモ積ス懸立ラレテ宇治路  
ヲ差テ引退陶山河野ノ逃敵ヲハ目ニモ不懸竹田河原ヲ  
筋替ニ鳥羽殿ノ北門ヲ打通リ作道ヘ懸出テ東寺ノ  
前成ル寄手ヲ取籠トス作道十八町ニ充滿タル寄手  
モ是ヲ見テ不レ叶トヤ思ケン羅精門ノ西ヲ横切ニ寺戸  
ヲ差テ引返ス小早川ト嶋津トハ東寺ノ敵ニ向カツテ追  
ツ返ツ闘梟カ己カ陣ノ敵ヲ河野ト陶山トニ被レ攘テ寄  
ノ勝ヲシツル更無念ニ覚ケレハ西七条ヘ寄タル敵ニ合  
テ声花一戦セント思テ西八条ヨリ上ニ西朱雀ヘソ懸  
出梟爰ニハ赤松入道究竟ノ兵ヲ勝リテ三千余騎  
ニテ扣タリケレハ左右ナク懸破ヘキ様モ無リケリ其ト而  
嶋津小早川カ横合ニ懸梟ヲ見テ(戦勞タル六波羅勢力ヲ得テ三方ヨリ攻  
合ケル間)赤松カ勢忽ニ開  
摩テ三所ニ踏留テ扣タリ爰ニ赤松カ勢ノ中ヨリ唯四  
人進出テ敵ノ数千騎扣タル中ヘ是非無ク懸ル兵有リ其  
威決然トシテ宛樊噲項羽カ忿レル形ニモ過タリ相近ニシ  
タカツテ是ヲ見ハ何モ長七尺斗成男ノ髭兩方ヘ生  
別テ眸逆様ニ裂上タルカ鏢ノウヘニ鎧ヲ重テキ大立  
上ノ髓当ニ膝鎧懸テ師子頭ノ冑ヲ猪頸ニ着ナシ五尺  
余ノ太刀ヲハイテ八尺計成鉄杖棒ノ八角成ルヲ手ニ元  
二尺斗マロメテ誠ニ輕氣ニ提タリ数千騎扣タル六波  
羅勢彼等四人カ分野ヲ見テ未ルレ闘先ニ三方ヘ別  
テ引退ク退敵ヲ招キ懸テ彼等四人大音声ヲ揚テ  
称梟ハ備前國ノ住人ニ頓宮亦二郎入道カ子息孫  
三郎(田中)藤九郎盛兼(同舍弟)弥九郎盛泰ト云者也我等父  
子兄弟勸武敵ノ身ト成シヨリ山賊ヲ業トシテ  
一生ヲタノシメリ而今幸ニ此乱出来テ忝モ万乗ノ君ノ【26オ】

御方ニ参ス而ヲ先度ノ合戦ニ指タル戦モセテ方ノ負ヲシタリシ夏我等力恥ト存スル間今日ニヨイテハ縦寄負テ挽トモ挽マシ亦敵強トモ其二依ルマシ敵ノ中ヲ破通り六波羅殿ニ対面申ト存スル也ト荒言ヲハイテ二王立ニソ立タリ梟嶋津ノ安芸前司父子二人是ヲ聞テ手者共ニ向テ申梟ハ日来モ聞及シ者共也彼等ヲ打シ夏大勢ニテハ中々叶マシ御辺達ハ且ク余所ニヒカヘテ自余ノ敵ニ可闘我等一(父子三)人相近テ追ツ返ツ且ク悩タランニ何カ敵ヲ討サラン彼縦力勁共身ニ矢ノタ、又事不可有亦【26ウ】

走夏早共馬ニハ余モ追付レシ多年稽古ノ犬笠懸今用ニ立スハ何時ヲカ期スヘキヤイテ不思儀ノ一戦シテ人ニ見セント云俣ニ唯二騎打抜ケテ四人ノ敵ニ相近頓宮九郎見レ之其名ヲ誰共不レ知トモ情(猛)クモ見タル志哉同ハ御辺達ヲ生捕ニシ寄ニナシテ戦セセントア嘲笑件ノ鉄杖棒ヲ打振テ静ニ歩近島津モ馬閑々ト歩寄テ矢比過ル程ニ成ケレハ先島津敵ヲ弓手ノ物ニナシ三人張二十二束二伏飽マテ固テ平トハナツ其矢心サス矢坪ヲ違ス籐九郎カ右ノ髯崎ヲ胃ノ菱縫板ヘカ【27オ】

ケテ籠半斗クツ(究)ト射籠タリ梟間急所ノ痛手ニヨハリ指モノ大力ナリケレ共目暗テ更ニ進不得舎弟彌九郎走ヨリ其矢ヲヌイテ投ステ君ノ御敵ハ六波羅殿ノ敵ハ御辺也余マシキ者ヲト云俣ニ兄カ鉄杖棒ヲ取リテ打振テ懸レハ頓宮二郎入道子息孫三郎各五尺二寸ノ太刀引側テ小跳シテ向(継)タリ島津元来物馴タル剛者ナル上馬上ノ達者矢番早ノ手達ナレハ少モ騒ス敵弓手ヘカ、レハ間鞭ヲ打テ押纏ニハタト射敵馬手ヘマハレハ弓ノ本ヲコシテ馬手切ニ平ト射西国名譽ノ【27ウ】

打物ノ上手ト北国無双ノ馬上ノ達者ト追廻シ懸違ヘ人交モセテ闘梟ハ希代無双ノ見物也去程二島津カ矢種尽テ打物ニ成ントシ梟ヲ見テ角テハ不叶トヤ思ケン朱雀ノ地藏堂ヨリ北ニ扣タル小早川百四五十騎ニテ叫テ懸梟ニ頓宮カ後ナル赤松カ勢ハト引退梟間頓宮父子兄弟四人鎧ノ透間内胄ニ各矢二三十筋射立ラレテ皆立痛ニ死タリケレハ見人聞ク人後迄モ惜又者コソ無リケレ美作国ノ住人神吉(菅家)ノ一族共ハ三百余騎ニテ四条猪熊迄責入テ武田ノ兵庫助槽谷高橋カ千余騎ノ勢ト【28オ】

懸合テ時移迄闘梟カ跡ナル寄ノ引退ヌル躰ヲ見テ元来不挽トヤ思ケン亦敵ニ後ヲ不レ見トヤ恥タリケン有元菅四郎佑弘同五郎佐光(同)亦三郎佐吉兄弟三騎近敵ニ馳並ヘ引組テソ伏タリ梟佐弘ハ今朝ノ軍ニ膝口ヲ切レテ力ヲ弱タリ梟ニヤ武田ノ七郎二押テ頸ヲカ、レ佐光ハ武田ノ二郎ヲ押テ頸ヲカキ佐吉ハ武田カ郎徒ニ刺違テ共ニ死ニ梟敵二人モ兄弟也寄二人モ兄弟也死殘テハ何カ為誘ヤ共ニ勝負ヲセントテ五郎佐光ト武田ノ七郎ト持タル首ヲ兩方ヘ投ステ亦引組テソ刺違梟是ヲ見テ福光ノ彦二郎【28ウ】

佐長上月ノ彦五郎重佐原田彦三郎佐秀鷹取小二郎種佐一度ニ馬ヲ引返テ無手ト組テハ動トヲチ引組テハ刺違ヘ二十七人ノ者共一所ニテ皆被レ討ニ梟(\*ハ其陣ノ軍ハ破ケリ)播磨国ノ住人

ニ妻鹿孫三郎長宗ト申ハ薩摩ノ氏長カ末ニテ筋力人ニ勝レ器量世ニ超タリ十二ノ歳ヨリ好テ相撲ヲ執リ梟ニ日本六十余国ノ中ニハ片手ニ懸ル者モ無リ梟人ハ類ヲ以集ル習ナレハ相伴ウ一族十七人皆尋常之人ニ超タリ去レハ他ノ手ヲ不レ交シテ一陣ニ進ミ六条大

宮迄責入タリ梟カ東寺竹田ヨリ勝戦シテ梟巢【29オ】

六波羅勢三千余騎ニ取巻レ十七(六)人ハ被レ討テ孫三

郎一人ソ残梟生テ益ナキ命ナレ共君ノ御大事是ニ

限マシ一人也共生キ残テコソ後ノ御用ニモ立メト独言シテ

唯一騎西ノ朱雀ヲ差テ挽梟ヲ印具ノ駿河守ノ勢五

十余騎ニテ追懸タリ其中三年ノ程二十斗ニ見タル若武者

一騎馳寄テ挽テ飯ル妻鹿ノ孫三郎ニクマント鎧ノ袖ニ執付

梟処ヲ孫三郎長キ肘ヲ差伸テ鎧ノ総角ヲ颯テ中ニ提

ケ三町計ソ行タリケル此若武者ハ只物ニヤ無リケン彼討スナ

トテ五十余騎跡ニ付テ懸梟ヲ妻鹿尻目ニ磔ト睨テ【29ウ】

敵モ敵ニヨルソ一騎ナレハトテ我ニチカツイテ伏スナ欲クハ是ヲ

取セン請取トテ左ニ提タル鎧武者ヲ右ノ手ニ執渡テ曳

ヤトソ投タリ梟輕々ト敵六騎カ上ヲ投越テ深田ノ泥ヘ

見ヘヌ程コソ投籠タレ是ヲ見テ五十余騎ノ者共一度ニ

馬ヲ引返シ逸足ヲ出テソ迹タリ梟赤松入道ハ殊更

今日ノ戦ニ憑切タル一族ノ兵共所々ニテ八百余騎被レ討

テケレハ機疲レ力落テ亦山崎ヘ引返ス

千種殿京責事付西山炎上ト

京都数度之合戦ニ官軍毎度ニ打負テ八幡山崎【30オ】

ノ陣モ小勢ニ成ヌト聞ケレハ主上天下ノ安危何有ンス

ラント宸襟ヲ惱サル即船上ノ皇居ニ壇ヲ被レ立テ天子自

金輪ノ法ヲ行ハセ給ウ其一二日ニ当梟夜三光天子光

ヲ並ヘテ壇上ニ現給ケレハ御願忽ニ成就シヌト憑敷ソ被レ

思召ノ梟去ラハ頓テ大将ヲ差上テ赤松ニ力ヲ合セ六波羅

ヲ可レ被レ責トテ六条少將忠顯朝臣ヲ(頭)中將二成レ山陽山

陰兩道ノ兵ノ大将トシテ京都ヘ差向ラル此勢伯耆国

ヲ立シマテハ僅ニ千余騎ト聞シカ路次ヨリ勢共馳加テ

程無く二十万騎ニ及ヘリ第六ノ若宮ハ元弘ノ乱ノ初武【30ウ】

家へ被レ虜(給)テ但馬国へ被レ流サセ給ヒタリシヨ其国守護

大田ノ三郎左衛門是ヲ執リ立進ラセテ近国ノ勢ヲ相催シ丹波ノ

篠村へ御出有大將頭ノ中將限無(不斜)悦給イテ此ノ宮ノ上

將軍ト仰キ奉リ軍勢催促ノ令旨ヲ成下サル四月二日

宮篠村ヲ御立有リテ西山ノ峯堂ニ(御)陣ヲ召サル相隨ル軍

勢廿万余騎谷ノ堂峯ノ堂葉室衣笠万石大道(路)松ノ

尾桂ノ里ニ居余テ半ハ野宿ニ充満タリ此時殿ノ法印良

忠ハ八幡二陣ヲトリ赤松ノ入道円心ハ山崎ニ旅ヲハシリ西山

ト八幡ト相去僅僅二十五(余)町カ程ナレハ方々牒合テコソ京

【31オ】

へハ寄ラルヘカリシヲ千種ノ頭ノ中將我勢ノ多ヲヤ被レ憑ケン

亦独ノ高名ニセントヤ被レ思レケン潜ニ日ヲ宣(定メ)テ四月八日ノ卯

刻

ニ六波羅ヘソ被レ寄梟今日ハ仏生日ニテ有レ心モ無レ心モ浴仏

ノ水ニ心ヲスマシ供花ノ香ニ誠ヲコラシテ遮惡持善ヲ亶

トスル習ナルニ時日コソ多ケレ滅(斎)日ニシモ合戦ヲ始テ天魔

波旬ノ跡(道)ヲ学ル、条得レ意カタシト人々舌ヲ齶ヘセル敵

寄ノ士卒源氏平互ニ交レリ笠符無クハ同作戦有ヌヘシ

トテ白布ヲ一尺ツ、二切テ風ト云文字ヲ書テ鎧ノ袖ニソ

被レ付梟是ハ孔子ノ語ニ君子之徳ハ風小人之徳ハ草【31ウ】

草ニ上レ之(加)風ヲ必スノ偃ト云意ナルヘシ六波羅ニハ敵ヲ西ニ待ケ

ル故ニ三条大宮ヨリ九条迄塀ヲ塗リ櫓ヲカイテ各射

手ヲ揚小路々々ニ兵ヲ千騎ニ千騎扣サセテ魚鱗ニ進ミ

鶴翼ニカコム様ニソ謀梟寄手ノ大将ハ誰ソトトウニ

先帝第六ノ宮副將軍ハ千種ノ頭中將(殿)ト聞ケレハサテハ軍

ノ成就(敗)心悪カラス源ハ同流也トイヘ共凡江南ノ橋ハ江北ニ

〔淮南淮北〕移レテ柎トナル習也弓馬ノ道ヲマモル武家ノ輩ト風月ノ戈ヲ事トスル朝廷ノ臣ト闘ヲ決センニ武家不勝ト云

不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>ト</sub>各勇進テ七万(千)余騎大宮面ニ打寄テ【32オ】

寄手遅シト待請(懸)タリ去程ニ忠顕朝臣ハ神祇官ノ前

ニヒカ(扣)ヘテ勢ヲ別<sub>テ</sub>上ハ大舍人ヨリ下ハ七条迄小路(每)ニ

千騎ツ、ヲ差向テ燒責ニ被<sub>ル</sub>責武士ハ(要害ヲ拵)射手ヲ面ニタテ、

馬武者ヲ後ニ置タレハ敵ノ所<sub>レ</sub>疼<sub>ヲ</sub>見テ蒐出々々追立<sub>ル</sub>官

軍ハ二重三重ニ悪手ヲ立タレハ一陣挽ハ二陣入替二陣ハ

退ハ三陣馳替<sub>テ</sub>人馬ニ息ヲツカセ煙塵天ヲカサメテ攻戦

官軍モ武士モ諸共ニ義ニ依テ命ヲ輕ンシ名ヲ惜ンテ死ヲ

諍シカハ寄<sub>ヲ</sub>タスケテ進<sub>ム</sub>ハ有<sub>レ</sub>トモ敵ニアフテ退ハ無<sub>リ</sub>ケリ

角テハイツ勝負可有<sub>ト</sub>モ敵ニアフテ不<sub>レ</sub>見<sub>ヘ</sub>梟処ニ但馬丹【32ウ】

波ノ勢共ノ中ヨリ兼テ京中ニ竊ニ人ヲイレテ置タリ梟間戦ノ

取中此彼ニ火ヲ懸タリ梟時節辻風烈ク吹テ黒煙立<sub>リ</sub>覆

ケレハ一陣ニ支<sub>ハ</sub>タル武士共大宮面ヲ引退テ尚京中ニ扣タ

リ兩六波羅聞<sub>レ</sub>之弱カラン方ヘ可<sub>レ</sub>向<sub>ト</sub>テ用意ニ残<sub>シ</sub>留タル佐々

木判官隅田高橋南部下山河野陶山富樫小早川三五

千余騎ヲ差副テ一条二条ノ間ヘ差向ラル此悪手ニ懸

合テ但馬守護大田三郎左衛門被<sub>レ</sub>討ニケレハ手者共三百

余騎一所ニ討死シテ二条ノ寄手ハ破二梟(朝忠高德行跡ノ事)丹波国

住人

荻野彦六ト足立三郎トハ五百余騎ニテ四条油小路迄【33オ】

責入タリ梟ヲ備前ノ国住人葉師寺次郎中吉ノ十郎丹

児玉カ勢七百余騎ト相支テ鬪梟カ二条ノ手破ヌト

見テケレハ荻野モ足立モ諸共ニ方ノ負シテ引返ス金村(持)

三郎ハ(七百余キニテ)七条東ノ洞院迄責入タリ梟カ深手ヲ負テ挽<sub>キ</sub>煩

タリ梟ヲ播磨國ノ住人肥塚カ一族二百余騎力中ニ取籠

出拔テ是ヲ虜テ梟丹波國神ノ池(尾)ノ衆徒ハ八十余騎ニ

テ五条西ノ洞院迄責入寄ノ挽ヲモ知テ鬪梟ヲ備中国住

人庄ノ三郎真壁ノ四郎三百余騎ニテ取籠一人モ余サス討

テ梟方々ノ寄手或ハ討止ラレ或ハ追立ラレテ皆桂川ノ【33ウ】

辺迄挽タリケレ共那和ノ小二郎ト児嶋備後三郎トカ向タリ

梟一条ノ寄手ハ未<sub>ダ</sub>挽剩ヘ懸ツ返ツ時移迄ソ鬪タル防

ハ陶山ト河野ニテ攻<sub>ル</sub>ハ那和ト児嶋也児嶋ト河野ハ一家ニテ

那和ト陶山ハ知人也日来ノ詞ヲヤ恥タリケン以後ノ嘲ヲヤ

思ケン死テハ尸ヲ曝トモ逃テハ名ヲ失ハシト互ニ命ヲ惜マス

叫(左注サケフ)喚(左注ヨハフ)テソ鬪梟(内野合戦敗北事)大将忠

顕朝臣ハ内野迄被<sub>レ</sub>挽タリ

梟カ一条ノ手尚相挑(左注争コト也)戦半也ト見ケレハ亦神祇官ノ

前ヘ引返シ使(者)ヲタテ、児嶋ト那和トヲ呼返サレケレハ彼等

二人陶山ト河野ト二向テ今日ハ已ニ日暮又亦明日コソ見參【34オ】

ニ入候ハメト色代シテ兩陣共ニ引別レ各東西ヘ去ニ梟日已

ニ夕陽ニ及ンテ軍散ケレハ大将頭中將本陣峯堂ニ

帰リテ軍勢ノ手負討死ヲ被<sub>レ</sub>註ニ七千人ニ余レリ其中ニ

宗ト被<sub>レ</sub>憑タリ梟大田金持以下一方ノ侍大将トモ成ヌヘ

キ者五十余人迄被<sub>レ</sub>討タリケレハ角テハ此陣ヲフマエン事

不<sub>レ</sub>叶<sub>ト</sub>ヤ思ハレケン大将児嶋三郎ヲ呼寄テ宣梟ハ敗

軍ノ士力疲テ再ヒ難<sub>レ</sub>鬪ト見タリ都近キ陣ハ悪カリ

ヌト覺レハ少<sub>シ</sub>塚ヲ隔テ陣ヲ執<sub>リ</sub>重<sub>テ</sub>近國ノ勢ヲ集<sub>テ</sub>

追テ京都ヲ責ハヤト思フハ如何計<sub>ル</sub>ラント宣ケレハ児嶋【34ウ】

三郎聞<sub>キ</sub>合ス軍ノ勝負ハ時運ニヨル事ニテ候ヘハ負ルモ必

シモ恥ナラス只挽マシキ所ヲ挽セ懸マシキ所ヲ懸サスルヲ以テ

大将ノ不覺トハ申候也何ナレハ赤松入道ハ僅ノ小勢ヲ

以三ヶ度迄京中ヘ責入叶子ハ引退トモ遂ニ山崎ノ陣ヲ



ハ去テ候ソ御勢縦大半被レ討テ候共所レ残ノ兵尚六波  
 羅ノ勢ヨリハ多カルヘシ此御陣後ハ深山ニテ前ハ大河  
 也敵若寄来ハ所レ好ノ執手成レヘシ穴賢此陣ヲ引ント  
 思召事候ヘカラス但寄ノ勞タル弊ニノツテ敵ノ夜討  
 ニ寄ル事モヤ候ラント存スレハ高德ハ七条ノ橋爪ニ陣ヲ取  
 テ相待候ヘシ御心安カランスル兵ヲ四五百騎梅津法輪ノ渡  
 ヘ差向テ警固サセラレ候ヘト申置テ児嶋三郎高德ハ其  
 勢三百余騎ニテ七条ノ橋ヨリ西ニソ陣ヲ取タリ梟千種  
 殿ハ児嶋ニ云番（差）ラレテ今ハ峯堂ニ御座梟カ敵若夜  
 討ニヤ寄スラント云ル詞ニ被レ邀テ弥臆病心ヤ付給ケン  
 夜半過ル程ニ宮ヲ具足シ奉テ葉室ノ前ヲ筋替ニハ  
 幡ヲ指テソ被レ落梟児嶋三郎此ル夏トハ不ニ思寄一ノ小  
 夜深方ニ峯ノ堂ヲ見遣タレハ陣々ニ星ノ如ク烈テ見ツル  
 篝火次第ニ数消テ所々ニ焼荒リ是ハ哀大將ノ落【35ウ】  
 給タルヤラント恠クテ事様ヲ見シニ為ニ葉室大道（路）ヨリ峯  
 堂ヘノホル処ニ萩野彦六朝忠浄住寺ノ前ニ行合テ大  
 將已ニ夜部ノ子刻ニ令レ落給テ候間無レ力我等モ丹  
 波ノ方ヘト志テ罷下候也誘サセ給ヘ打烈申ント云ケレハ  
 児嶋三郎大ニ忿テ此ル臆病ノ人ヲ大將ト憑梟コソ  
 越度ナレ頓テ打烈申ヘケレトモ直ニ直様ヲ見サランハ後  
 難可有早御通候ヘ高德ハ何様峯堂ヘアカリテ宮ノ  
 御坐ノ所ヲ見奉リテ頓テ追付参ラスヘシト云テ手者  
 共ヲハ皆籠ニ留置テ唯一人落行勢ノ中ヲ推分々々【36オ】  
 峯堂ヘソ上リ梟大將之御座ツル本堂ヘ入テ見レハ能ク惆  
 テ、被レ落梟ト覺テ錦ノ御旗鍔直垂迄被レ捨タリ備  
 後三郎余ニ腹ヲ立テ、哀此大將ノ何ナル堀険ヘモ落入テ死  
 給ヘカシト独言ヲシテ暫ク尚本堂ノ縁ニ嚙シテ立タリ梟カ

今ハ其コソ手者共カ待煩タルラメト思ケレハ錦御旗計ヲ  
 卷テ下人ニ持テ急キ浄住寺ノ前ヘ走下リ手者ニ打烈  
 テ少馬ヲ早タレハ追分ノ宿ノ東ニテ萩野彦六ニソ追付ケ  
 ル萩野ハ丹波丹後出雲伯耆ヘ落梟勢篠村禪田ノ  
 社ニ打集テ三千余騎有梟ヲ相伴路次ノ野伏ヲ追払【36ウ】  
 テ丹波国高山寺城ニソ楯籠梟（谷堂炎上事）去程二千種頭中將（殿）西  
 山ノ陣ヲ落給ヒヌト聞シカハ四月九日京中軍勢十万余騎  
 谷堂峯堂松尾万石大道（路）葉室衣笠ニ乱入テ仏閣  
 神殿ヲ打破リ僧坊民屋ヲ追捕又財宝ヲ悉ク運取  
 テ後ニ在家ニ火ヲ懸タレハ時節魔風烈ク吹懸テ浄住  
 寺寂福寺西方寺ニ尊院総テ堂舎三百余宇  
 在家五千余間一時ニ灰燼ト成テ仏像経卷忽ニ寂  
 滅ノ煙ト立上彼谷堂ト申ハ伊与守義信（義親）ノ嫡子延朗上  
 人造立ノ靈地也此上人幼稚ノ昔自武略累代ノ家【37オ】  
 ヲ離レ偏ニ寂莫無人ノ室ヲシメ給ヒシ後戒定恵ノ三  
 学ヲ備ヘテ六根浄ヲ得給シ人タリシカハ法花誦誦之  
 窓之前ニハ松ノ尾明神座ヲヒサシクシテ耳ヲカタフケ  
 真言秘密ノ扉中ニハ総角（右註十四ノ異名是迄カミヲワゲテ居モノナ  
 リ）護法手ヲ束子テ給（奉）仕シ  
 給フ此ル有智高行之上人草創セラレテシ（シ）砌ナレハ二百余  
 歳ヲ経テ今ニ到迄智水流清ク法灯光明也三間四面  
 ノ輪藏ニハ転法輪ノ相ヲ顯シテ七千余卷ノ経論ヲ納メ  
 奇樹恠石ノ池上ニハ都卒官ヲ粧ヲ写シテ四十九院ノ  
 楼閣ヲチリバム十二ノ欄干珠玉天ニ捧五重ノ塔婆金【37ウ】  
 銀月ヲヒケリ（引）恰極楽浄土七宝莊嚴ノ分野モ角ト  
 覺ル計也亦浄住寺ト申ハ戒法流布ノ地律宗作業  
 砌也釈尊入滅ノ刻金棺（右註ヒツギ）未レ閔チシ時速疾鬼ト云梟

鬼神双林樹ノ下ニ近キ仏之御齒(牙)ヲ一引欠テ是ヲ取ル四部ノ大弟子是ヲ驚テ留ントシ給梟間彼鬼片

時(間)ニ四万由旬ヲ越テ須弥之四天王へ逃上ル章駄天此

ニ有リテ是ヲ奪テ終南山之道宣律師ニ与ラル其ヨ

リ以来嗣々(左注)相承シテ吾朝ニ渡タリシヲ弘仁ノ御代ニ此

寺ニ安置シ奉ル(ヲ、イナル)偉哉大聖世尊滅度ニ二千三百余【38オ】

年之後仏肉尚(ニ)此ニ留リテ分布天下ニ周キ事此ル靈

瑞奇特之大伽藍ヲ敵陣ニ取タレハトテ悉ク被レ亡梟

ハ偏ニ武運之可レ尽前表ニヤト人皆唇ヲ翻梟カ

果シテ幾程モ不(レ)在ニ六波羅(江州)番場(宿)ニテ亡ニ梟(類

悉(鎌倉ニ亡ケル)コソ不思議ナレ積悪ノ家ニ必余殃有(トハ)彼様ノ事ヲヤ申へ

キ)

太平記卷第八【38ウ】